
白い黒と黒い白

道化童子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い黒と黒い白

【Zコード】

Z3589BA

【作者名】

道化童子

【あらすじ】

ナスカは白魔法科に所属し、水魔法を専攻する学生ではあるが、実は黒魔法である火の魔法が得意だった。一方、黒魔法科に所属し、火魔法を専攻するも、実は白魔法である水魔法が得意な少女シェリンと補講教室で出会う事になった。第一回このライトノベルがすごい大賞落選作品を改修した作品。Pixivにも投稿。

第一節

「結局どこなんだよ、教室……」

廊下を歩きながらぼやく少年。

「『西館』一階の三番目の教室」ってどれだよ、どこからだよ……寝

昧すぎるんだよ」

悪態をつく彼が向かうのは、最終補習の教室。

彼はこの学園の一年生で、ナスカという名前だ。

ここに来てほぼ一年となる。

つまり一年生の終わりを迎えたわけだが、彼の一年生は、まだ終わりを迎えられはしなかった。

劣等生の彼は、学年末のテストで不合格となつたのだ。

そして、再テスト、再々テスト、再々々テストを次々と落第し、最終的にこの最終補習を受ける事になつたのだ。

「しかし、最終補習って何やるんだ。黒魔法科の連中と合同つて聞いたけど、自習か？」

教室を一つ一つ探して回る放課後。

やる気も何もなかつた。

ここは剣と魔法の世界。

大陸の西を領土とする、発展した文化を持つカドメ王国は、勇敢な騎士団で有名な国だ。

そして更に、高度な魔法研究が盛んであることでも有名である。

この国には白魔法と黒魔法を共同で研究する魔法研究施設がある。仲の悪い白魔法と黒魔法をまとめただけでも凄い事だが、更にここにはその研究成果を学ぶ下部組織、カードウ魔法学園があるのだ。ここでは魔法の素質ある若者たちが、その素質を伸ばすための教育を受けている。

学園はいくつかの学科に分かれているのだが、大きな学科で言えば白魔法科と黒魔法科の学生が大半となる。

この一つの違いはと言えば、実際は使う元素が違う程度だが、長い歴史が多いなる分断を作つてしまつていた。

白魔術は、教会を発祥とし、元々は人々を癒し、魔を祓うために作られ、教会で研究されてきた魔法で、光や水、土の元素を用いる。黒魔術は純粹な兵力として、特に中央の影響力の及びにくい地方の貴族などが研究させて作られてきた魔法で、火や雷、風の元素を用いる。

白魔法を使う教会側から、黒魔法は悪魔の術であると言われたことから、根深い対立があつた。

歴史の裏では、血で血を洗う抗争が繰り広げられてきた。それを先代の王が、結局同じく元素を利用する魔法であり、合同で研究した方が合理的である、との指摘を受け、王の命で合同の研究施設を作るに至つた。

もちろん完全に仲良くなつたわけではなく、王の命令で表面上仲良くなつただけの話ではあるが。

そしてその施設も既に長い期間を経て、合同研究で新たな事実も分かり、この学校も多くの魔法使いを輩出するようになつて來た。ナスカは、そんな学校の白魔術科でとことんまで落ちこぼれいる学生である。

「えつと、多分ここっぽいな？」

「どこから」という明確な基準のない「西館」階の三番目の教室と思われる教室を外から覗いてみる。

中では一人の女生徒が、辺りをきょろきょろしていた。

制服からして、黒魔法科の生徒だろう。

察するに、彼女の心はこんな感じなのだろうか。

（え？ だ、誰も来ないよ？ 本当にここでいいのかな？ 私、間違えた？ ど、どうしよう……）

少女の見た目は悪くない。

多少小柄だが、不安げな大きめの目が可愛く、穏やかそうな少女

で、とても火や雷を操つて敵を攻撃しそうには思えない。

いや、それが出来ないから、この落ちこぼれの教室にいるわけではあるが。

ともかく、仲間がいる事で多少安心したナスカは教室に入る事にした。

「ぐりえ！ フライングえめるフライシューファイナル！……」

実はナスカは変な事をして人を混乱させる事が多い生徒でもある。

「え？ きやーーーー！」

単に叫びながら教室に踏み込んでジャンプしただけだが、いきなりやられると大抵の人間は驚く。

ぱしゅん

ナスカの顔に水飛沫が当たる。

「……っ」

少女が咄嗟に出したのは、水魔法。

それには殺傷力はないが、押し黙る程度にはダメージを受けた。

「あ……！」ごめんなさい！」

少女の慌てる声。

ナスカは多少ふらついたが、立ち直った。

目の前の少女は、申し訳なさそうにナスカを見ていた。

「ふむ、以後気をつけたまえよ」

ナスカは無意味に気取つて見せた。

実際ナスカの無意味で唐突な行動が引き起こした事であり、少女にあまり非はないのだが。

「本当にごめんなさい」

だが、少女はとにかく謝った。

「まあ、それはそれとして」

ナスカはハンカチで顔を拭きながら言つ。

「最終補習の教室はここでいいんだよな？」

「うん、多分いいと思うし、私も最終補習なんだけど……」

少女は何か言いたげにナスカを見つめる。

「……？」

女の子に、意味ありげな上目づかいで見つめられると、多少の事では動じないナスカも少し困惑してしまつ。

ナスカは性格と成績こそ残念だが、顔は整つてあり、女生徒にはもてる方だ。

特に、生徒の9割が女生徒という白魔法科において、ナスカは「顔は格好いいけど、付き合つのは無理」「黙つていれば格好いいんだけどね」などと噂される注目の的なのだ。

だから、一部の将来聖職者になるうといふ少女たちの、限りない慈愛の瞳で見られたりする事には慣れているのだが、こういう視線には慣れていない。

「……なんだよ、俺の顔に目と鼻以外に何か付いているって言つのか？」

「えつと、口？」

「まあ、それは付いてるだけで飾りみたいなもんだ。使わないからな」

「はあ……」

多少茫然とした目に変化した少女。

「あの、そんなどうでもいい事より……」

案外的確にナスカを精神的に痛めつける少女。

「さ、さつきの事は、内緒にしておいて欲しいの」

「つむきながら、小さな声で言う少女。

「さつきの事つて、脳内の誰かと楽しげに歓談していた事か」

「そんなことしてないよー？」

「じゃあ、何だ」

「えつと、その……」

少女は再びうつむいて、辺りに人がいないかを確かめながら、小声で言つ。

「水魔法を使った事……」

真つ赤な顔で、消え入りそうな声で少女が言つ。

「ああ……」

ナスカは理解した。

魔法にはそれぞれ属性というものがあり、それを鍛えて行くものなのだ。

例えば、ナスカは水の魔法属性という事になつていて。

それを使い続ける事で、その魔法の属性が深まり、より大きな魔法が使えるようになる。

だが、別の属性の魔法を使うと、それが弱くなる。

だから、この学園では他の属性を使う事を推奨していない。

特に、黒魔法科は白魔法属性、白魔法科は黒魔法属性を使う事を校則で禁止している。

それを破ると、謹慎・停学等の罰を受ける事もあるのだ。

「別にいいが、魚心あれば水心と言つてだな、分かるよな?」

ナスカはよく知らないが、最近読んだ物語で悪徳権力者が言つていた台詞を言つてみた。

ちなみにその物語は、懇願をたてに悪徳権力者が女に体の関係を迫るものだが、正義の魔法使いに退治されてしまう。

「よ、よく分からぬけど、ハチミツ食べる?」

少女は自分のカバンの中からハチミツのビンを取り出す。

「いや、いらないというか、なんでそんなもん持ち歩いているんだ」

「……好きだから」

「だろうけど……まあ、別に言つ氣はないけどな」

ナスカは、不正を先生に言いつけるような人間ではない。

「でも……」

だが、少女は不安げにナスカを見上げる。

「あー、じゃあ、こうだ」

ナスカは、周囲に誰もいないことを確認すると、右手の指を真上に差し出す。

すると、そこから炎が湧き出し、徐々に大きく噴き出した。それは強い光を放つが、すぐに消えた。

「これでいいだろ？」

「……？ あ、ハーネースト？」

「まず、ハチミツから離れる」

ナスカは周囲を再度確認する。

「俺も黒魔法使ったから同じだつて事だよ」

「ああ、うん、分かつた……ありがとう」

自分のミスのために、自らも校則を破つて共有してくれたナスカへの純粋な謝意。

ナスカは言葉通りを受け取るのが照れくさいが、茶化す雰囲気でもなかつたので、話題を変えることにした。

「ところで、とっさに水魔法が出てくるような奴がどうして黒魔法科にいるんだよ。最初から白魔法科にいれば良かつたんじゃないかな？」

ナスカは単純な疑問を言つてみた。

魔法には属性があり、人はその属性を極めることで一つの魔法を身に付ける。

少女が水魔法が得意かどうかは不明だが、少なくとも好きな人間が、黒魔法科にいても、何の得にもならない。

黒魔法属性があればいいのだろうが、ここにいるといふ事はさつぱりなのだろう。

「…………」

少女は、言いにくそうに目をそらした。

「あー、込み入った事情があるなら別に言わなくてもいいけどね」「言つても、笑わない……？」

「は？」

少女が真剣な表情で訊く。

そのあまりの真剣さに、ナスカは少しだけ怯む。

「い……や、笑う」とは、ないと思つけど……」

「じゃあ、言つよ……あのね

少女が意を決して口を開く。

「入学申込書に、黒魔法と白魔法のどちらかに丸を付けるところがあつたでしょ？」
あれを間違えて、黒魔法の方に丸つたちゃ――

「女帝傳」

「爆笑！？」
笑わないって言つたのに！」

「井辺の少女」

1

卷之三

す。

一
あ
一
悪
が
一

「ああ。アーヴィング、おまえの悪魔って

全く正反対の学科であります。」

「嘘つき！ うわーん！」

母娘かほこが少女

ナスカは頭をかく。

「俺のは別に笑える話じゃないんだが……」

「大丈夫、絶対に笑つてあげるからー。」

「いや、その宣言はどうだろ？』

先ほどの仕返しに笑う気満々の少女。

そうであればある程言いにくいや、少女の話を聞いた上、大笑いしてしまった手前、言わないわけにもいかない。

「俺もさ、確かにここに来るまでは火魔法が得意で、だからこの学園に来たんだ」

「あはははははははー！ あっ、まだだつたー！」

「……眞面目に聞けとはさすがに言わないが、ちょっと黙つてくれ」

ナスカの突つ込みにさすがに黙る少女。

「けどさ、俺の親父は聖職者じゃないけど、敬虔な信者で白魔法の実力者なんだよ。また古い考え方の人でさ、黒魔法なんてものは絶対に許さないって、無理やり白魔法科に変えられたんだよ」

今までほとんど誰にも言つていない話を、何故か会つたばかりの少女に言ひ羽目になつた状況に若干の違和感を感じながら、話を続ける。

「で、ある程度火属性が出来上がりっていた俺には当然白魔法の属性に染まるわけもないからさ、こうして一年がかりでここまで落ちこぼれたんだよ」

黙り込む少女。

最早笑う氣すらないのだろう。

「どうだ、全然笑えない話だつただろ？」

「……する」

「は？」

「そんな、ちゃんとした理由、ずるいー」

少女は、突然猛烈に怒りだした。

「いや、そんなことを怒られてもだな」

「もつと、入学申込書で丸つける時に誰かと肘が当たつてずれたとかそんな理由じゃなきゃやだ！」

「そんな奴いないだろ。いたら指をして笑つてやる」

「うわーーん、また笑われる！」

「お前かよ！」

ナスカもさすがに突つ込み疲れて來た。

元々ボケ属性の強いナスカには突つ込みは慣れないポジションなのだ。

「もういい。あー疲れた……そう言えば先生来ないな。本当にここでいいのか？」

「だと思うけど、知らない」

「だろうな。……そう言えばさ、あー、名前知らないけど仮にゲルゲゲとしよう、なあゲルゲゲ」

「どうしてゲルゲゲ！？ 名前くらい聞いていいから！ 私はシェリンだよ」

少女は自分の胸を指して言う。

「まあ、じゃあそれでいい。ところでさ、黒魔法科の……」

「せつかく名乗つたんだから呼んでよ！」

「面倒くさい奴だなあ、シェリンは」

「そんな呼び方は駄目！」

ナスカはいちいち面倒になつて來たので、下手に出る事にした。

「分かつたよ、シェリン。いい名前だな」

全くその気のない表情で言うナスカ。

「そ、そう？ ありがとう、えつと……ゲルゲゲ？」

「ナスカだ。それはいい。ちょっと黒魔法の教科書見せてくれないか？ 僕も白魔法の教科書見せるからさ」

ナスカは、カバンから自分の教科書を出してみせる。

「う、うん」

シェリンは多少戸惑いながらも、カバンから教科書を出してみる。

「じゃ、ちょっと見せてくれ」

ナスカがシェリンの教科書を手に取り開いてみる。

シェリンもしじうがなく、ナスカの教科書を開いた。

「へえ……」

シェリンがとりあえず選んでいる属性は火だった。

その教科書は、ある程度の火魔法を体得している人間にとつて、とても分かりやすいものだった。

炎の增幅法、一点へのパワーの集中、空気の薄い場所での使用法など、火魔法の基礎が存分に書かれた分かりやすい教本となっていた。

そして、それはシェリンも同様のようだった。

ナスカが仮に選んだ水魔法が彼女にはとても理解しやすいものなのだろう。

二人は集中してそれを熟読した。

先ほどまでの騒ぎはなくなり、教室に静寂が訪れた。

どれだけの時間が流れただろう。

集中していた彼らには長時間という感覚がなかつたが、しばらくしてから、先生が教室に現れた。

「おお、やつぱりこっちにいたのか。全然来ないからどうしたもんかと思つてたんだよ」

適当な教室名を書いた先生は、やはり別の教室にいたようだ。

「んー、まあもう遅いし、お前らも自分で勉強してたようだし、もう合格でいいんじゃないか？ どうせ簡単な小テストするだけだからな。じゃ、お前らもう帰れよ」

言つだけ言つて、先生は帰つて行つた。

「何なんだ」

せつかく集中して読んでいたのに水を差されたナスカは、少しだけ気分を害していた。

「まあ……帰れと言われたから、そろそろ帰るか」

「うんうん」

シェリンはそう言いながらも本から目を離さなかった。

「おい、ゲルゲゲ」

「うんうん」

「人に肘がぶつかって黒魔法科に行つたドジなシェリン」

「うんう……うわーん！」

やつと正気に戻つた。

「あんたなんて！　たつた今覚えたキュアで回復してあげるんだから！」

「落ち着け、そしてありがとう」

なんだか少しだけ回復したナスカは、シェリンの肩を掴んで落ちつかせる。

「！　う、うん……」

ナスカの顔を間近で見たシェリンは、少しだけ頬を染めて目をそらす。

「ま、今日はもう帰るわ」

「で、でも、もつちよつとだけ読みたい！」

「奇遇だな、俺もだ」

ナスカはシェリンの手から教科書を奪い、カバンにしまつ。

「ま、折角知り合つたんだから、また会おう。その時に教科書をまた見せ合えばいい」

「え、あ、うん……」

少しの戸惑いと、少しの嬉しさと、少しの希望。

そんな淡い感情とともに、シェリンはうなずいた。

「また、会いましょう」

黒魔法と白魔法の最低成績者の一人は、いつもして邂逅することとなつた。

第一節

「そういうわけなので、決められるなら、次の休みまでに決めるよう。それ以降はこちらで勝手に決めるからな」

困惑のざわめきが広がる教室。

だが、それも仕方がないだろつ。

白魔法科一年生の一クラス。

落第しかけたナスカもなんとかこのクラスに籍を置くことが出来た。

一年に上がったところで、特に変わらないいつまらない授業が続くのかと思いきや、二年から合同演習というものがあるようだ。

これは、実際に学校外に出て、魔法の実地訓練をしてくるものなのだが、グループを組んで行う。

これがなかなか難しく、大抵の生徒は自分でグループを組むことができない。

なぜなら、条件が厳しいからだ。

- ・おおよそ5人程度、4人から6人のグループを作る
- ・グループ人員の属性は全員別でなければならない
- ・最低一人は白魔法科および黒魔法科双方の人間がいなければならない

一見簡単なようだが、白魔法科と黒魔法科の間にはなんとなく溝があり、普段の接点はない。

元々の知り合いがいるならともかく、大抵は相手の科に友達はない。

そこには根深い問題があり、なかなか難しいのだ。

元々の対立の歴史なんて、今の学生には関係のないはずではある。だが、やはり歴史は歴史である。

先生の世代、先生の先生の世代の対立が、この世代へと遺伝していることも往々にある。

そもそも魔法使いというものは多くが自分の魔法自分の属性が一番だと思っているところがある。

その上、方向性が異なる魔法を使うとなると、もつ理解できない人種となるのだ。

ナスカのように、黒魔法の属性を持つのに白魔法科にいるような人間は、白魔法科の人間も黒魔法科の人間も大して変わらないことを知っているが、大抵の人間はそうではないのだ。

交流がないことによって、「嫌われているかも?」と思いつ込んでいる生徒が多く、それ故に「だったら、こちらも親しく出る必要はないよね」と勝手に思うことも多いのだ。

だが、実際には多くの属性があり、それらが相互協力することで大きなパフォーマンスを發揮することが出来る。

それは口で言つても理解がなかなか難しい、だからこそ合同演習なのだ。

チームを自分たちで決められる生徒はほとんどない。

だから、ほぼ全員先生が決めたチームで演習を行うことになる。そうなると、相手の科はもちろん、同じ科の友達とも同じチームになれないため、困りどころもあるのだ。

「うーん、まあでも、別に誰とでもいいしなあ

ナスカは基本的に人見知りしないため、誰とでもつまみやつていけるので、チーム構成はどうでもよかつたりもする。「どうでもよくありませんわ」

そんなナスカのつぶやきに答える者がいた。

透き通るような白い肌と長く雑じり気のない金髪。折れそうな細い身体。

見た目も流れる血も、生粋のお嬢様。

「何でだよ、エメリイ」

「……まずは、そろそろその呼び方をやめていただけませんか?

私は枢機卿様からいただいた、エメリフィーという名前があるのです」

「長い上に格好悪い」

ナスカはあつさり言つ。

「枢機卿全否定！？…………私の名前ですし、かりそめにでも尊重していただけませんか？」

「いやでも、エメリイの方が可愛いからいいんじゃないか？」

ナスカが言う、特に深い考えのない言葉に、彼がエメリイと呼ぶ少女は一瞬で真っ赤になる。

元々の肌が白いだけにその辺かは一層分かりやすい。

「……ナ、ナスカ様がそうおっしゃるのなら仕方がありますね」

エメリイは顔を隠すためにナスカに背を向ける。

「で、何がどうでもよくないんだ？」

「……？　何のことですの？」

「いや、さつきどうでもよくない、とか言つて現れたじゃないか」

「あ、ああ、そうでしたわね」

エメリイが軽く息を吐く。

「先生にお任せすると、私とナスカ様が一緒のチームにならなくなるかも知れませんわよ。裏から先生に手を回す方法もありますが、ナスカ様はお怒りになりますでしょ？」

「んー、まあ、そうだろうな」

ナスカは軽く返事をする。

ナスカは基本的にいつも軽い性格ではあるが、一度エメリイに切られたことがある。

それは彼女が、金の力で教師を動かそうとした時だ。

ナスカは怒った上で、二度と話しかけるな、と言つた。

その時はエメリイが泣いて反省して謝つたことで仲は戻ったのだが、それ以降、それまでちょっとお高く止まっていた感のある彼女が少し接しやすくなつた。

更に、それまでも入学前からの知り合いで仲はよかつたのだが、

その事件以降、いつもナスカについてくるようになった。

簡単に言えば、これまでわがままが通つてきたお嬢様が叱られて、

ナスカが気になる存在になつたのだ。

「チームが違つてしまえば、ナスカ様のお世話が出来なくなりますわ」

エメリイが困つた様子で言つ。

「いや、別に世話なんて要らないぞ。まあ、どうしても困つたら、白魔法科の子は優しいから同じチームになつた子が助けてくれるだろうし」

「演習は黒魔法科の方も一緒ですよー。あの人たちは白魔法の悪いところを見つけては大声で笑うのですわよー！」

「いや……まあ、そういう奴もいるかもしれないけどさ」

見てきたかのように言つエメリイに、呆れ気味に言つナスカ。

「それに私はナスカ様のお父様に、ナスカ様をよろしくと頼まれたのです。その責務を全うできなくなりますわよ」

「いや、だから、それは親父の社交辞令みたいなもんだって」

エメリイの父は、上位の貴族であり、また敬虔な信者もある。

同様に信者であり、また白魔法使いとして名のあるナスカの父と親交が深い。

そして、ナスカの父はナスカを無理やり白魔法科に入れたことからやけにならないかと心配し、エメリイに頼んだところはある。

エメリイは純粋なお嬢様であることもあり、頼まれたことには責任を持つてしまうのだ。

「どうしてもつて言つなら、チーム作ればいいけど、知り合いいるのか？」

「黒魔法科になんか、知り合いなんていませんわ」

平然と言つエメリイに、知り合いいないのにどうして見て来たかのような黒魔法科の悪口が言えるんだよ、と突っ込みたくなつたが、言つても意味がないので言わなかつた。

「ナスカ様はお知り合い、いらっしゃらないんですの？」

「あー、んー、いないことはないけどなあ……」

ナスカはシェリンの顔を思い浮かべる。

「あいつはどうなんだろなあ……」

「お知り合いがいらっしゃいますのね。確かに黒魔法科は殿方も白魔法科よりも多いと聞きますし」

「いや、女だけどな」

ナスカがいふと、エメリイが傍目でも分かるほどに驚く。
「ナ、ナスカ様？ その方はどういう関係の方ですか？ 親しい人ですの？ か、可愛い方ですか？」

「どうしたエメリイ、とりあえず落ち着け」

「……は、はい。申し訳ありません……」

エメリイは大きな深呼吸をした。

「そ、それで、その方はどなたですか？」

「んー、シーリングっていつ、この前の最終補習で会った子なんだけ

ど」

「最終補習……といふことは、黒魔法科最下位の方ですね」

エメリイは少しだけほつとする。

そんな人間なら自分が太刀打ちできる、と思つたのだろう。

「そんな方は私たちのチームには相応しくありませんわ。せめて足を引っ張らない方でないと」

「いや、俺も最下位なんだがな……」

「ナスカ様は私と一心同体です！ だからいいんですの！」

「そんなものになつた覚えはないが……ま、知つてちょっと話をしたつてだけだから、向こうもいきなりチームを組もうと言われても困ると思うな」

「そうですか……」

エメリイが複雑な顔をする。

黒魔法科の知り合いがいるならチームが組める。しかし、ナスカの知り合いで女生徒というところがあまり気に入らない。だから、これで良かったのか悪かったのか分からぬ。

「ま、チームを作りたいって言つなら、また考えよつ。他に何かで
きるかもしれない」

ナスカが立ちあがる。

「今日は帰ろう。校門まで送る」

「はい、ありがとうございます」

エメリイは少しだけ嬉しそうにそう言って、自席に荷物を取りに行く。

カードウ魔法学園は基本的に全寮制である。

殺傷力の高い事もある魔法使いを、不安定な育成中の状態で外に出せない、演習や夜間講習など夜間に及ぶ授業も多いことからの規則なのだが、あくまで原則だ。

貴族の子等はほとんど寮に入っていないし、特殊な種族の生徒は寮での集団生活を嫌い、やはり寮には入っていない。

エメリイはまさにその貴族の令嬢であり、毎日送り迎え付きで家に帰っている。

「お待たせいたしました」

帰る用意を持つて、戻つて来るエメリイ。

「じゃ、行くか」

「はいっ」

二人は教室を出る。

廊下は下校する生徒、話しかけている生徒が沢山いて賑やかだ。

「あ、ナスカくん、エメルフィーさん、さよなら」

「おう、明日」

「じきげんよう」

挨拶を交わしながら歩く廊下。

階段を下り、出入り口に向かつ一人。

そこは、色々な学年や科の生徒が入り混じる空間。

喧騒も大きいが知り合いも少ない。

「あ、いた！」

そんな中、聞いたことのある元気な声が響く。

一瞬だけの静寂と、視線の集中。

振り返るナスカが見たのは、こちらを指さす少女。

「シェリン？ もしかして俺に用か？」

「うん、そう！ えつと……ゲレゲレ？」

「……お前はどの科にいても落ちこぼれたと思うぞ？」

「そんなことないっ！ 忘れただけ！ えつと……なんだつた

？」

思い出そうと試みたものの結局思い出せないシェリン。

「俺は麗しのダンディだ」

「そう！ 麗しのダン……あれ？ 違う気がする…」

「よく気付いたな、結構頭がいいぞ」

「そ、そとかな……えへへへ……」

褒めてもらいないのに照れるシェリン。

「ナスカ様、こちらのユニークなお方はお知り合いでありますの？」

「あ、そうそう、ナスカ！」

エメリイの問いに、シェリンが割り込む。

「あー、まあ、知り合いのシェリンっていう劣等生だ」「ひどい！」

「で、こっちはエメリイだ」

「ごきげんよう」

「あ、こんにちは」

挨拶を交わす二人。

だが、ナスカはエメリイが少し不機嫌になつてている事が分かつている。

彼女は黒魔法科を良く思っていないからだ、とナスカは思った。

実際は、見知らぬ少女がナスカと仲がいい事を気に入らないのだが。

「あー、とりあえず一人とも悪い奴じゃないから……」

「そんなことより！」

これからエメリイを説得しようとしていたナスカの言葉を遮り、

シェリンが言つ。

「ねえねえ、合同演習でチーム組まない?」

「へ? ああ……」

「こっちでね、友達三人とチーム作つたんだけど、白魔法科の人が必要だつたから、入つてくれると嬉しいな。あ、エメリイさんも一緒に」

一方的に話すシェリン。

エメリイは少し呆気に取られている。

「んー、まあ別にいいぞ。こっちもチーム探してたし」

「ナスカ様!?」

「? 駄目か? サつき探してるつて言つてたから」

「いえ……駄目ではありませんが……」

エメリイが複雑な表情を見せる。

「? いいんだよな?」

「……ええ、構いませんわ……」

「ほんと!/? ジヤ、他の子呼んで来るね」

そう言うと、シェリンは走り去つて行つた。

「……ナスカ様、あの方とはどういづじ関係ですか?」

エメリイが少し不安げに訊く。

「言つただろ、最終補習の時に会つたんだよ」

「……それだけにしては、とても仲がよろしくありません?」

「そうか? まあ、話しやすい奴ではあるな」

ナスカはシェリンの去つた方向を見つめながら言つ。

エメリイは、何か言おうとしたが、シェリンが戻つて來るのが見えたため、言わなかつた。

「呼んで來たよ!」

嬉しそうに戻つて來るシェリン。

彼女が連れて來たのは黒魔法科の制服を來た二人の女生徒だつた。一人は黒い髪を左右で束ねた少女。

気の強そうな顔で、じつとこちらを睨んでいる。

もう一人は肩にかかるない程度の髪に知的な瞳、そして非常に小

柄な身長の少女。

「あのね、こっちの人がエメリイさん、でこっちが……えっと、ゲルマン?」

「お前はなにか、俺を忘れる呪いでもかけられてるのか?」

「違うよ! 覚えにくい名前なの!」

「いや、絶対違うと思う」

こんなやり取りの中でも、ちょっとしたピリピリ感が漂っている。「ま、こっちの紹介はこっちでやるから、そっちの紹介してくれ」「う、うん……あのね、この子がアールヴァンテ。アールって呼んでるの。雷属性なの」

シェリンは黒髪の少女を紹介する。

アールと呼ばれた少女は、挨拶もせず、ふん、とそっぽを向いた。「で、でね、この子が……」

「ボクはトイネルヴィ。長いからトイネって呼んでね。風の属性を専攻してるんだ。よろしくね」

シェリンが紹介する前に、小柄な少女は自ら名乗った。

「あ、あのね、トイネは成績は黒魔法科一番なのよ」

シェリンが負けずに紹介する。

「じゃあ、そっちも紹介してよ」

「ん、ああ、こっちが……たしかエメルフィーだつたつけ。長いからエメリイって呼んでる。光属性の魔法を使う」

「よろしくお願ひしますわ」

ナスカの紹介に、エメリイが頭を下げる。

「あ! あの技の人?」

突然シェリンがエメリイに尋ねる。

「? 何の事ですか?」

「あの、えーっと、確かフライングえめるフラッシュファイナル」

「……それはおそらく、ナスカ様が私の名前で遊んだだけですわ。私はそんな技なんて持つてません」

そう言いながら、エメリイはナスカを睨む。

「ま、そんな事はともかく。俺がナスカ。まあ、一応水属性つて事になってる。シェリンとは最終補習で会った」
ナスカは適当に自分の紹介を終えた。

「で、この五人でチームつて事で

「ちょっと待ちなさいよ

突然割つて入ったのは、先ほどからずっと黙つていた、黒髪のアール。

「あんた、最終補習受けるような成績最下位の役立たずなんですよ。なんでこんなのとチームを組まなきゃならないのよ」

アールはナスカを指さして言つ。

「あー、まあ言いたい事は分かる……」

「聞き捨てなりませんわね！」

ナスカがやんわり受け流そうとしたところ、エメリイが受けて立つてしまつた。

「ナスカ様を悪く言つ事は許しませんよ」

「いや、さつきお前、シェリンの事全く同じよう言つてたじゅ……」

「ナスカ様は黙つていてくださいまし！」

「…………！」

いつも淑やかなエメリイの大声に、ナスカは黙つてしまう。

「そもそも白魔法なんて金持ちが道楽でやつてる役立たずなのに。回復魔法が使えるからまあ、足手まといでも我慢してあげてもいいのに、それが使えないなら必要ないのよ」

アールは見た目通り気の強い少女で、やはり白魔法を嫌つていた。だが、そう言われて黙つているエメリイではない。

「白魔法は教会で研究されてきた由緒正しいのですわ。黒魔法こそ田舎貴族の道楽にお恵みいただいて生きながらえて来たのではありませんの？」

「何よ！」

「何ですの！」

エメリイとアールが一触即発の状態で対峙している。

「こんなところで魔法でも使われたら停学や退学にすりなりかねない。」

しううがないので、ナスカは仲裁に入る事にした。

「まあまあ、ここはワシの顔に免じて引いてはぐださらんか」

「何者よあんた！」

「ナスカ様はお黙りくださいまし！」

矛先がナスカに変わっただけだった。

第二節

「この国は、騎士で有名な国であり、昔から騎士団入りを希望する少年は多かった。

だから、この学園に来て魔法を学ぼうとする学生は、その残り、つまり女子学生のほうが多くなる傾向にあった。

ただ、近年では魔法が高度化し、それを学ぼうとする男子学生も増え、また、女性騎士も増える傾向にあり、男女比は平準化されつつあった。

だが、彼らの世代になって、とある事情で急激に騎士団を志願する少年が増え、魔法を学ぼうとする学生が激減してしまったのである。

現在、この学園は男子生徒よりも女子生徒が圧倒的に多い。

だから、チームを組めば、男子一人女子四人という構成は普通にあることでもある。

だが、そんな一般論は今のナスカには関係なかった。

「えー……とりあえず落ち着いていただき誠にありがとうございました」

ナスカは深々と礼をしてみる。

往来の喧嘩で騒ぎになりそうだったので、必死で近くの教室に連れ込み、座らせて、やつと冷静になつたところだ。

ナスカは女同士の喧嘩の仲裁なんてやつた事もないが、シェリンはおろおろするだけであり、トイネは静観しているだけなので、彼が動かなければならなかつた。

「まあ、色々あるとは思いますが、チームになるわけですし、みんなで仲良く……」

「嫌よ」

限りなくへりくだつて話していたナスカの話をあつさり断つたのはアール。

「あんたは駄目だし、あの女も嫌い。あんたたちとチームを組む気はないわ」

「何ですって！？」

「あーもう、落ち着けって！」

ちょっととつつき方を間違えるとすぐに再燃してしまつ。

さすがに楽天的なナスカも頭が痛くなつてきた。

もうしばらく放置して、好きに喧嘩させて疲れるのを待とうか、と投げやりに思い始めた。

「ねえねえ、あのね」

そんなナスカにこつそりと話しかけて来るのは、隣に座っていたシェリン。

「アールを悪く思わないでね。あの子悪い子じゃないの」

「うーん、あそこまで攻撃的だと、さすがに難しいなあ。でもそれはエメリイも同じか……」

ナスカは喧嘩を続ける一人を見めながら答える。

「で、でもね、成績の悪い私をかばってくれるし、助けてくれるし、色々教えてくれるの。本当は優しい子なんだよ！」

「へえ」

ナスカは少しだけアールを見直す。

要するにエメリイと同じなんだろう。

お互に役に立たない人間をサポートしていく、だからチームを組みたくて、そのチームは役に立たない人間がいるから、それ以外の人間を最高にしたいのだろう。

そうなると話が少し見えて来た。

後は、黙つている小さな少女がどういうスタンスか、だろうか。

「ところで」

ナスカが少し大きめの声を出すと、喧嘩していた一人も振り返る。

「トイネ、だつたつけ？ お前はどう思つてるんだ？」

「え？ ボク？ 何が？」

いきなり話を振られて驚くトイネ。

「いや、チームの構成とか白魔法と黒魔法とかの話」

「うーん、チーム構成はやつてみないと分からぬよな。学校の授業だけじゃ分からぬから演習があるんだし。一年生の成績が悪いから演習が出来ないとも限らないし逆もそうだし」

トイネがあつさりと二人の喧嘩の原因を否定したので、二人は反論も出来なくなつた。

「白魔法と黒魔法は、分けてることそれ自体馬鹿馬鹿しいと思つてゐるよ。同じように元素を使う魔法だからね。単にそれを研究して来た団体と歴史が違つてだけで、今も分かれてるつていうのも変な話だよ。

逆にお互いの歴史を研究すれば新たな事実が出てくるかもしだいのに。

今活躍してる魔法使いたちが完全に分かれていて、結局その弟子たちが研究施設にて、だから反目しあうんだよね。

外の世界の分断が、研究施設の派閥を生んで、それがこの学園の科を生んで、お互いの科が疎遠になつてしまつのも変だよね。

じういう構造は内部からじや変えられない。

でも、外の魔法使いの世界はもつとひどいから、外部からも難しい。

かと言つて権力のある王様は魔法の事情に疎いからなかなか難しいんだよね」

「……うん」

ナスカはとりあえずそう返事した。

他のみんなも同じ気持ちだろう。

喧嘩をしていた二人も、そんな気すらなくなつて呆気に取られてゐる。

「トイネの言いたい事は分かった」

とりあえず、白魔法と黒魔法の反目を馬鹿馬鹿しいと思つている事は分かつた。

だつたら、説得すべきは喧嘩している一人だけだ。

「俺も、白魔法と黒魔法は同じ原理だし大して変わらないと思つて
る、シェリンは違ひが分かるか？」

「え？　え？　違ひ？　何か違うの？」

シェリンはナスカが思つた通りの反応をする。

「うん。まあ、違いを考えると、そんなにないと思う。でも、いきなりそれを納得して考えを変える、と言つても難しいだろう。トイネも言つたけど、大の大人たちからそれが出来ないんだからな」

ナスカは少し息を大きめの呼吸をする。

「ここからが重要なところだ。

「でも、とりあえずは嫌な奴、役に立たない奴でいいから、一緒にやつてみるのは大事だと思う。実際やつてみてもやつぱりそう思うなら、その考えを変える必要がない。でも、それでやつぱりそうでないと分かつたら、考えを変えればいいと思うんだ」

ナスカが慎重に言葉を選んで言つと、教室は一瞬しん、と静まる。「で、ですがナスカ様……」

「エメリイ、お前はいつもは穏やかで優しい奴だろ？　ちょっと喧嘩売られただけで、そんなに取り乱したりしなくともいいんじゃないいか？」

「……申し訳ありません」

エメリイは、しゅん、とうな垂れる。

「俺の事を馬鹿にされたのが取り乱した原因だし、お前が優しいのは十分わかってるし、これまで助けてくれた事をありがたいと思つてる。だから、これは俺のワガママだけど、いつも優しいお前でいて欲しいんだ」

ナスカが言葉を選びながら言つと、エメリイは顔を上げ、徐々に顔が赤くなつたかと思うと、再び下を向いた。

「はい……分かりましたわ……」

エメリイは消え入りそうな声で言つた。

「さて、アール

「な、何よ」

ナスカがアールに振ると、アールは少しだけ身構える。

彼女はトイネの言葉で戦意を失つており、また、喧嘩相手のエメリイが大人しくなってしまった事から、今更喧嘩をする気もないが、かと言つていきなり勢いを失うのも何となくできずに、自分でも困つている。

「多分、だけど、お前がチームを組む目的って、シェリンなんじやないのか？」

「え？ そうなの！？」

理解もしていなかつた当事者が驚く。

アールは一瞬困った顔をして、シェリンを見、ナスカを見て開き直る。

「そうよ。それがどうしたのよ」

アールはそっぽを向きながら答える。

「やつぱりそなんだな。シェリンをサポートするためにチームを自分で作りたい。そうなると、シェリン以外に足を引っ張りそうな俺は駄目、黒魔法を馬鹿にするような事を言つエメリイもシェリンと一緒にさせたくない。シェリンの失敗を馬鹿にするかもしれないからな」

「…………」「…………」

アールは何も言わない。

それは肯定を意味するものなのだろう。

「お互い不満のあるメンバーってのもあると思う。けど、お互いチームを作りたいて目的は共通だとと思う。多分、他にチームを組めるメンバーをお互い知らないんじゃないかな？」

誰も何も言わない。

その事は十分過ぎるほど分かつてゐるからだ。

「とりあえず、その利害のためだけでも手を組まないか？」 喧嘩でチームの足を引っ張らなかつたら、喧嘩したつていいし、文句言つたつていい。うまく行くかどうかとか、そんな事はやってみないと分からないし、それでも先生にチームを組んでもらうより遙かにマ

シだと思つんだ」

ナスカはゆつくりと、それぞれの田を見ながら説得する。

静寂。

戸惑い。

ナスカが少し不安に思つた頃。

「ボクはいいよ。ナスカくんつて面白そうだしね」

トイネがにつこり笑つて言つ。

「わ、私も！ チーム組みたい！」

ショリンがそれに続く。

「……ナスカ様がそうおつしやるのなら、……」

エメリイも賛成してくれる。

これで四人がチームを組む事に賛成した。

残りの一人も賛成せざるを得ない状況だろ？

「分かつたわよ！ ショリンがいって言つならいいわよ。でも、

言いたい事は言つわよ！ いいわね！」

少し怒つたように言つアール。

「ああ、それがチームつてもんだね？」

ナスカが言つと、アールはやはり不機嫌そうにしていたが、それ以上何も言わなかつた。

「じゃ、これで決まりだね」

「ああ。じゃ、今日はもう終わりにして、明日にでもチームの提出をしよう。昼休みは空いてるか？」

「うん、空いてるよね？」

ショリンが一人に確認し、一人が肯定する。

「じゃ、明日の昼に話し合つて提出しよう。とりあえず食堂で」

「分かつた。あー、じゃあ、一緒にご飯食べよ？ チームなんだし！」

ショリンがいきなり提案する。

チームを組むことをそれぞれが了承したとはいえ、微妙な空気が漂つている中、ショリンの空氣の読めない提案は、均衡を崩す恐れ

すらあつた。

「俺はいいけど……どうかな？」

ナスカはエメリイをちらりと見る。

「……ナスカ様がいいのなら構いませんわ」

少しだけ嫌そうな顔をしているが、肯定自体はした。

「あと、そつちのアールも……」

「いいわよ、好きにすれば？」

「トイネもいい？ ジャア、明日はみんなでご飯を食べましょー！」

シェリンは一人無邪気にそう言つた。

ナスカは、今日の喧嘩の続きがないように祈るばかりだった。

「今日は、本当に申し訳ありませんでしたわ……」

背後からの声に、ナスカは振り返る。

チーム結成から数分後、黒魔法科の彼女らと別れて、ナスカは最初の目的通り、エメリイを送りに校門に向かっている。

「？ 何がだ？」

「先ほどは取り乱してしまい、喧嘩をしてしまいましたし、ナスカ様にも失礼なことを言つてしましました……」

「ああ、まあ、確かにちょっと困つたけどな」

ナスカが言うと、エメリイは申し訳なさそうにうつむく。

「でも、うぬぼれるなよ。あの程度、俺がお前を普段困らせているレベルの足元にも及ばない。もつと精進するんだ」

「は、はあ……え？ あ、いえ、これ以上困らせるわけには……」

「いいんじゃないのか？ 女ってのは、少し男を困らせた方が魅力的らしいぞ？」

ナスカが言う。

深い考えのない、軽い言葉だったが、エメリイはそれを重く受け止めた。

「……ナスカ様は、困らせる女性の方がお好きなのですか？」

「困るのはやだなあ、面倒くさいし」

「ですか　ですよね」

「でもまあ　」

ナスカはやはり深い意味もなく、軽い気持ちで言つ。

「エメリイなら、仕方がないよな」

「……………!?」

エメリイはやはり、それを必要以上に受け止める。

「エメリイにはずいぶん世話になつてゐるし、かなり困らせてると思
うからなあ。多少困らされても仕方がない」

「いえつ、あのつ、わたくしはナスカ様をお世話する立場として…

…」

顔を真つ赤にしてうろたえるエメリイ。

「それに、今回も俺の事を馬鹿にされたから怒つたんだしな。本当にエメリイには頭が上がらないな」

「……………当然のことを、したまでですわ」

エメリイはこれ以上なくうつむいて赤面を隠し、つぶやくような小さな声で言つ。

「ま、そんなわけだから気にするな。怒つたエメリイも可愛かった
しな」

「……………」

エメリイは更に顔を真つ赤にすると思ひきや、大きなため息をついた。

「そう言えば、ナスカ様はそういう方でしたわね……」

「？　どんな奴だ、俺？」

ナスカは不思議そうに聞く。

エメリイは、もう一度大きなため息をつく。

大抵の人間は思春期を過ぎると、異性に氣を使うようになる。
不用意な発言をしたりしないように言葉を選んだり、変な意味に
取られないように考えながら話すようになり、結果慣れるまではぎ

「ちなくなるものだ。

だが、ナスカにはそのようなものはない。

不用意な発言も誤解されそうな発言も平氣でして、だから変な事も沢山言つが、どう聞いても愛を囁いているとしか思えない事も平氣で言ひ。

白魔法科ではそれでしょっちゅう女生徒を赤面させている。

普段言つている事が変な事ばかりであるため、そのギャップから本当に恋をしてしまいそうになる女生徒も多少いない事もない。

だから、エメリイはナスカが思つていてる以上に困らされている。「何でもありませんわ。ナスカ様は、優しくて、格好よろしくて、背も高くて、大好きですっ！」

「な、何だよいきなり？」

「いつもの仕返しですわ」

そういうとエメリイは足早に校門を抜けて行く。その向こうには執事と思しき男性が待っていた。ナスカはその様子を半ば茫然と見つめていた。

「何だつたんだ……」

つぶやきながらナスカは校門を背にした。

「あ、あの……」

校内に戻ろうとしていた彼に呼びかける声。

「ショリンか。迷つたのか？ 寮はこっちじゃないぞ？」

「違うよつ。寮はそんなに迷わないもん」

「少しは迷つのか。まあいい、どうしたんだ？ あの一人はどうした？」

「あの一人はもう寮に戻つたと思うよ……あのね……」

ショリンは、うつむいてもじもじし始めた。

「トイしなら俺に言わなくとも行けばいいぞ？」

「違うつ！ もうきいつけばいい出した！」

「そんな報告はいらん。用件を言え」

「だ、だからね、お願いなんだけど、言わないでってこと」「お前がトイレでどれだけ出したかなんて、いちいち言つわけがないだろ？」「違うの？－ それは言つてもいいの？－」

「それは女子としてどうだらう？」

「あ、あのね……私が、本当は白魔法科に行きたかった事、言わないで」

ショリンに懇願される。

彼女にお願いされるのは、これで三回目だ。

「ま、あのアールって奴は白魔法嫌いつぽいしな。そんな事がばれたら、さすがに縁を切られる事はないだらうけど、多少ぎこちなくなるだらうしな」

「う、うん……」

「ま、言わないし言つつもりもない……いや、ハチミツはいらないえ？ いいの？」

ショリンは出しかけたハチミツをしまつ。

「俺だつてもうチームメートだからな。団結が崩れるような事はない」

「うん、ありがとう」

ショリンはにっこり笑う。

「じゃ、寮に帰るか」

「あつ、ちょっとだけ教科書見せてよ。一年生の－」

「あー、じゃ、一旦どこかの教室に行くか」

「うんつ！－」

元気よく答えるショリン。

夕暮近い校舎。

一人の影がその大きな影へと消えて行く。

第四節

カーデウ 魔法学園の学食は非常に広く、充実している。

それはこの学園が基本的には全寮制であり、全生徒が利用する事を前提としているからだ。

メニューも豊富だが、ほとんどの生徒が定食を注文している。女子生徒に人気のアンオーズ定食と、男子生徒に人気のジン定食だ。

現王妃と現王の名を冠した定食は、安さの割に質量ともに十分という人気定食なのだ。

「あ、こっちはこっちは！」

ナスカはそのジン定食をトレーに乗せ、シェリン達を探していたが、彼女が大声で呼びかけたのですぐに分かった。

そこには既に黒魔法科の三人が座っている。

「あそこか、いい場所じゃないか」

「そうですね……」

エメリイは答えながら、少しだけ不安な表情だ。

彼女は普段は淑やかで優しい少女なのだが、どうにも昨日のように、喧嘩をして我を忘れてしまう事もある。

出来ればそんなところを見せたくはない。

だから、その原因となりそうな人には会いたくはない。

だが、ナスカが乗り気であり、またチーム結成自体には彼女自身のメリットもあり、反対する気もない。

先行して歩くナスカについて行くだけだ。

「よう、いい場所だな」

「でしょ、あのね、授業が終わった瞬間にダッシュして来たんだよ ショリンが嬉しそうに話す。

「それは学生の姿勢としてどうかと思うが、よくやつたぞ」「えへへへ

嬉しそうな彼女の隣に、ナスカが座る。

その隣にエメリイが座る。

位置として、ショリン、ナスカ、エメリイの順だ。

そして、ショリンの対面にアール、ナスカの対面にトイネが座っている。

ショリンとアールがアンオーズ定食、トイネがサンドイッチを自分の前に並べている。

ちなみにエメリイは家から持つてきた弁当だ。

もちろんただの弁当とはわけが違うのだが。

「じゃ、いただきまーす」

ショリンが早速食べ始める。

他の人間もそれに続き食べ始める。

ナスカも食べ始めたが、ふと顔を上げて田の前を見る。

「トイネはそれで足りるのか？」

ナスカは、小さなサンドイッチ一枚をもしゃもしゃ食べているトイネを見る。

「うん、これで十分だよ」

「ちゃんと食べないと大きくなれないぞ」

「むう。分かつてるけど、食べられないんだもん」

トイネが少しだけむくれながら言つ。

「ま、女の子は背が低くても可愛いって言われるだけだからいいけどな」

「へえ、じゃ、ナスカくんはボクの事、可愛いと思うんだ?」

「努力を怠るな! もっと努力して小さくなるんだ!」

「さつき大きくなれないぞ、とか言つた人の言つ事じやないよね」

トイネが笑う。

「まあ、せめてミルクでも飲むんだ。やるよ」

ナスカは自分のトレーからミルクのコップを差し出す。

「ナスカくん、昼からミルク飲んでるんだ」

「あなた、ミルクを注文すると『ママのおっぱいしゃぶつてな』と

か言われて、『俺、母さんいないんだ』とか言い返して微妙な空気になるのを毎日期待してな」

「うーん、何からつっこもうかなあ……」

「あーもうー 学食にそんなこと言う人がいるか！ 微妙な空氣作つてどうするのよー そんなことのためにわざわざノルク注文するな！」

それまでナスカを相手にせずに黙っていたアールがこらえきれずに突っ込んだ。

「素晴らしい。さすがは俺の見込んだ奴だ」

「あんたに見込まれた覚えなんてないわよ」

「じゃあ、今見込んだ」

「何よそれ」

ナスカは、トイネの前にミルクを置く。

トイネは少し躊躇しながらも、それに手を付ける。

「白魔法科の奴は上品なお嬢様が多くてな。こういつ事を言つても、ただ微笑むだけだったり、困った顔をしたり、苦笑いしたりするんだよな。だから打つても響かないというか」

ナスカが言うと、エメリイが少し申し訳なさそうな顔をする。

ナスカは何の気なしに、一番強硬そうなアールと話すきっかけとして言つたのだが、まさに上品なお嬢様であるエメリイは、自分が責められているように感じたのだ。

「何よ、黒魔法科が下品だつて言いたいの？」

「悪い方に取るなよ。ボケる人間からすれば、突っ込まれるのは嬉しい事なんだぞ」

「私はあなたのボケを突っ込むために生きてるんじゃないわよ」

「そんな事はわかってるさ。それじゃ夫婦だからな」

ナスカの軽い一言に、周囲の空気が変わったが彼自身は全く気付かなかつた。

「ただ、楽しい演習が出来るなって言いたかっただけだ。同じ演習なら、楽しい方がいいだろ？」

「うんうん、楽しい方がいいね」

「そうだね。ボクも楽しいのは好きだね」

「ナスカ様がお好きなら……」

ナスカの言葉に、アール以外の三人が答える。

「……楽しいのがいいのは私もだけど、私が突っ込みを乐しがつてやつてると思わないでよね」

「ま、それでいい。で、せっかく集まつたんだからも、昨日よりも少し戦力的な自己紹介でもしてみようか。お互に何が出来るかつて、必要だと思うんだ」

ナスカは全員に、語りかけるように言う。

「ま、そうだね。全員誰が何を出来るかが分かつていたら、いざという時困らないよね」

トイネがそれを受ける。

「じゃ、言いだした俺からでいいかな。俺は水の属性って昨日も言つたが、正直魔法は何もできない。シャレにならないほど出来ない。ただ、魔法以外の科目には自信がある」

「魔法は出来ないのにそれ以外は自信あるの？ 何よそれ」

「ナスカ様は本当に成績は優秀ですわ、魔法以外。社会も、経済も、政治も、兵法も、ほとんど満点に近いですわ」

「……騎士団にでも行けばよかつたんじゃない？」

アールが呆れたように言う。

「まあそう言われても仕方がないが、色々と事情があつたんでな。とりあえず俺はこんなところだ。じゃ、エメリイ行くか？」

「あ、はい……」

エメリイは少し姿勢をただし、少し息を吸つてから話し始めた。

「私の属性は光です。闇の力に囚われたアンデッド系の者たちを闇から解放する事が出来ます。他には光を強めて熱を発したりする事も出来ますし、呪いからの解放、あと闇を照らす事も出来ますわ」「あと、予言も出来るんだつたっけ？」

「予言なんて出来るの！？」

シェリンの驚く声。

「い、いえ、出来ませんわ……。予言は何十年も修行を積んだ方たちのうち、ほんの一部の方がやつと少し信頼のおける予言が出来る、とこ'う程度のもので、私も一応その訓練はしておりますが、予言が出来ると言えるほどではありますまいわ……」

エメリイが少し恥ずかしげに答える。

「ふうん……」

アールが役に立たないわねえ、と言いたげだつたが、さすがに今日は大喧嘩をしたくはないのだろう、それ以上言わなかつた。

だから、エメリイも少しカチンと来たのだろうが、何も言わなかつた。

「……後はヒーリングが、肉体的、精神的なものは出来ますわ。毒抜きも出来なくはないですが、こちらは水魔法が本流ですから、それほどでは」

「つまり、猛毒にかかると誰も助けられないってことね」
アールがナスカの方をちらりと見ながら言つ。

「……なんですか？」

「事実でしょ？」

「まあ、落ち着けって」

慌てて仲裁に入るナスカ。

喧嘩は本意ではない二人はそれ以上は黙つた。

アールは誰も猛毒を解消することは出来ない、と言つたが、実はそうでもない。

シェリンはナスカの教科書で勉強をし、毒抜きくらいは簡単にできるようになつたのだ。

それはシェリンが話すなと言つているからこゝで言つ事はない。
そして、ナスカだけが火の魔法が使えるという話になると、必ずどこかで矛盾が生じるので、それも言つ事はない。

「とにかく、私はそのくらいですわ」

エメリイはそう言つと、多少憮然としたまま黙る。

「じゃあ、次は誰にする？順番で言えればトイネでいいのか？」
ナスカが目の前にいるトイネに聞く。

「うん、いいよ」

トイネがにこにこと笑いながら答える。

「ボクは風の魔法だけど、風は使いよつては何とでもなるから、出来る事を言つて行くのは大変かな。かまいたちのように切り裂く事も出来るし、空気のシールドを張る事も出来るし、クッショングのよつに緩衝に使う事も出来るんだ」

「言つとくけど、ほとんどの風属性の生徒はそこまで器用に使ひこなせないわよ。トイネだから何でも出来るのよ。確かに空も飛べるのよね」

トイネの説明に、アールが補足する。

「へえ、空も飛べるのか。あんまりそつこう奴見た事ないな。今度一度見せてくれよ」

「…………」

ナスカの言葉に、トイネが彼をじつと見つめる。

「…………？」

「……見たいの？」

「ん？　ああ。まあ、無理にとは言わないが」

トイネの、少し怒つたような雰囲気に、ナスカは言葉を濁す。
「飛ぶことは出来るんだけど、下から空気を巻き上げて飛び上がるんだ」

「ほうほう、そうなのか」

「この恰好で、そんな事をしたら、どうなるか分かるよね？」

トイネが自分の胸の辺りを指差す。

彼女の服装は普通の黒魔法科の女子制服だ。

当然スカートであり、下から風が吹いたらどうなるのかは考えるまでもない。

「……見たいの？」

トイネは、再度ナスカに訊いた。

そこには一つの意味がある事は、誰が聞いても分かる。

「見たいな」

だが、ナスカはあっさり答える。

そんな答えを想像もしていなかつたトイネは、一瞬とまどひ。 「自分の体を宙に浮かせるなんて、落下するリスクを考えると普通は怖くて出来たもんじやない。それが出来るつて事は相当自信があるつてことだ。トイネの魔法を一度見てみたくなつたな」

「だから、ボクはスカートなんだつてば」

からかいで言つた事に、全く別の答えを返されて、少し困惑しながら答えるトイネ。

「それだけ自在に風を操れる奴が、自分のスカートの制御が出来ないわけないだろ?」

「……まあ、そうだけど」

トイネは少しむすつとした顔で答える。

彼女は、ナスカが慌てるところを十分に楽しんだ後、その種明かしをしようと思っていたのだ。

「ナスカくんつて案外つまんないね」

トイネはむくれたまま、横を向く。

「そんな事ないよ、ナスカは面白いよ? どこがって聞かれたら、分からぬけど……えっと、生き様とか?」

ショーリンが何一つ根拠が見いだせない言葉でナスカを擁護する。

「ショーリン。俺はふざけた奴だけど、滑稽な生き様という意味ではお前には勝てないと思う」

「そ、そうかな……」

ショーリンが何故か照れて嬉しそうな表情をする。

「ま、それはそうと、トイネの魔法は、直接攻撃はもとより、相手を吹き飛ばしたりする事も出来るよな。考え方によつては色々な作戦が立てられるかもしね」

「そうだね。その時にならないと分からないけど、状況によつて使い方を思いつくかもしね」

トイネが前を向いて答える。

「よし、じゃあ今後も精進するよ！」

「あんたこそね」

ナスカの必要以上に偉そうな態度にアールが突っ込む。

「じゃあ、次はアールだ。雷を落とすんだっけ。得意そうだな」

「……なんか引っかかる言い方ね。私は雷属性。そのまんま雷を操る事が出来るわ。場合にもよるとは思つけど、一般的には最も強力な攻撃力を持つ属性ね。ただ……言いたくはないけど、欠点もあるわ」

アールは少しだけ迷つてから口をつぐむ。

彼女はまだ白魔法科の一人には気を許してはいない。自ら欠点をさらけ出す事がためらわれたのだ。

「欠点って何だ？」

何となくそれを感じたナスカが促す。

「…………」

アールは渋々口を開く。

「……電気だから、通電するのよ」

「あー。そりゃそうか」

「大雨が降つたりしてたら、敵味方関係なく通電する事もあるわ。……もちろん技術があればある程度コントロール出来るけど、私はトイネほどのコントロールは出来ない」

アールはいつもとは違い、少し小さな声で、答える。

「でもまあ、逆に考えれば多くの敵を一撃で倒せるんだな」

「まあ、そうだけど、細心の注意を払わないと味方も攻撃してしまうし、それに音や光が目立つから、隠密には出来ないわよ」

「欠点なんて、どんな魔法にでもあるだろ？ そうでなきゃこんなにたくさんの種類の魔法がそれぞれ使われるわけないんだから」

「…………」

アールはじつとナスカを見つめる。

ナスカが何を言いたいのか、概ね分かつていてるが、それでも聞き

たかつたのだ。

「分かつたのは雷属性は攻撃に特化していく、多数の敵にも攻撃で来て、音と光が格好いいって事だ。それだけでいいだろ？」

ナスカの言葉に、アールは「あんたが聞いて来たんじゃないの」と小声でつぶやいたが、それ以上は何も言わなかつた。

「えーっと、最後はシェリンだが、そろそろ申請の準備もあるからいいや」

「どうして!? 私もやる！ 私も意外と凄いの！」

シェリンが勢いよく立ちあがる。

「まあ、どうしてもつて言うならやつてもいいけど、俺はそれを聞いて『それがどうした』としか言わないぞ？」

「う、うん。あのね、私は火の属性だけど、それは苦手なの。勉強も大体全部苦手でよく分からぬの。でもね、料理は得意！」

「それがどうした」

「ひどい！」

宣言通りの事を言われて、それはそれで涙目になるシェリン。

「ま、シェリンがこの中でどう役に立つかはやってみないと分からぬ。意外と役に立つかもしれないしな」

ナスカはシェリンが水属性で、水の魔法をある程度使える事を知つてゐる。

それはこの中でも大いに役に立つはずだと理解している。

問題はそれを他人に知らせずにどう使うか、だが。

それはそれとして、シェリンは役に立つ事を知つてゐるが、と暗に伝えて安心させたかつたのだ。

「う、うん。おなががすいた時にきっと役に立つよ！」

だが、シェリンは見当違いの理解をし、更に安心した。

「あ、あとハチミツが好き！」

「それがどうした」

「ひどい！」

シェリンは全く同じ返答に、全く同じよう涙目になる。

「分かつた分かつた。また今度料理とハチミツを食わせてくれ」

「あ、今でもいいよ」

「いや、食後にハチミツは食べない主義だ……あと、そのデザートにハチミツはいかがなものかと思う」

アンオーズ定食が女子生徒に人気の理由の一つに、デザートが付いている事がある。

今日はゼリーの中にフルーツが入っているものようだ。

シェリンはそのデザートになみなみとハチミツを注いでいる。

「え？ おいしいよ？」

シェリンはそれをおいしそうに食べている。

ナスカは食べていないため、その味を知らないので、合つかどうかは分からぬ。

だが、同じものを食べたはずのアールが微妙な顔をしているところを見ると、普通の人間には合わない取り合わせなのだろう。

「……ま、趣味趣向は人それぞれでいいとして」

ナスカはなるべくシェリンの方を見ないようにして、話を切り替える。

「この五人で組む、という事でこれからチームの提出に行くけど、それでいいよな？ 本当のところ、それぞれの属性や実力を理解している先生に組んでもらった方がバランスのいいチームが出来ると思う」

ナスカは一呼吸置いて全員を見渡す。

まだデザートを食べているシェリン以外は既に食べ終わり、ナスカの話に耳を傾けている。

「このチームは必ずしもバランスがとれているわけじゃない。それでも、このチームで本当にいいのか？」

ナスカが訊くと、一瞬全員が黙る。

これは最終確認である。

既にこのチームでやる事は決まっている。

だが、今ならまだやり直せる。

「私はやると言つた以上やるわよ」

最初に返事をしたのは、意外にもアールだった。

「チームだから、あんたたちだつて助けるし、協力だつてするわよ」

「ああ、ありがと、アール」

「でも、だからと云つてあんたたちや黒魔法科を……」

「私もやるつ！」

アールの言葉を遮つて、ショーリンが叫ぶ。

「わ、私もですわ」

「ボクもいいよ」

エメリイもトイネも雪崩れるように返事をする。

「よし、じゃあ決まりだ。これからよひじくー。」

ナスカの声と、それに呼応する声に、食堂の中の生徒たちが注目

をした。

第一節

カードウ魔法学園の一学年以降に行われる演習は、その名の通り、実際のフィールドで、実際に社会に出て役立つような指令をこなす。それは例えば調査だつたり、潜入だつたりすることも多いが、やはり敵を倒して來い、というものが一番多い。

学生の時代からそのような体験をさせることは、非常に有効ではある。

だが、昨日まで机上や教室や専用の施設で魔法を勉強・練習してきただけの学生を、いきなり実践に放り込むことは、リスクも非常に高い。

学生達は攻撃の仕方も有効な攻撃法も頭では知っているが、戦いを全く知らないのだ。

そのような学生にいきなり戦わせては、死傷してしまつことも往々にしてある。

昔の学園では演習で人が死ぬことも珍しくはなかった。
そのため、今では本当の実践の前に数回ほど仮想演習を行うことになつている。

これは研究所の魔法使い達が作った仮想フィールドに敵やトラップを配置し、実演をさせる演習で、このフィールド内で怪我をした
り、場合によつては死んだりしても、実際には傷一つ付かない、とい
うものなのだ。

もちろん、フィールド内にいる時は実際と同じように痛みを感じるし、感覚もおおよそ変わりがない。

そのため、死の恐怖はそのまま体感できるのだ。

ここでの数回の演習で、一度も誰一人死んだり、大怪我を負わなければ、晴れて実際の演習に行くことが出来る。

ちなみにフィールド内は完全に安全である、という前提の下、教官は誰も監視はしない。

もちろんやるうと思えば、フィールド外から監視も出来る。

だが、フィールド内では場合によつては夜を明かしたりするほど長時間になることもあるのだ。

逐一監視するところことは、生徒同士の会話だけでなく、トイレや水浴びを覗くことでもある。

そこまで生徒を管理して、何が得られるわけでもないし、教師もそんなに時間を持て余しているわけでもない。

何しろ安全なのだ。

とにかく、誰も死傷せずに、指令をこなすという結果を出せばいい。

そんな仮想フィールドの中、林間の細い道を歩く五人。

「何か変な感じだね。仮想フィールドなんて思えないね」

初演習とは思えないほど暢気なシェリンの言葉。

「よし、じゃあ、とりあえず夜営だ。シェリン、料理の準備！」

「うん！ 頑張るよ！」

元気に答えるシェリン。

「ちょ、ちょっと待つてください。まだ演習が始まつたばかりで朝方ですわよ」

「分かつてゐるや」

「……でしたら、何故ですか？」

「なんとなくだ」

「……まあ、分かつてはいましたが」

エメリイのため息。

「ねえ、火を起したいんだけど！」

「あなたもお料理の準備はおやめくださいまし。それに火を起したいなら、あなた以外に最適な方はおられませんわ」

早速薪を集めていたシェリンにあきれのエメリイ。

「ええっ、野営じゃないの？」

「夜営にしては朝早すぎるね」

「そうだぞシェリン。初演習だからって浮かれすぎだぞ」

「え？ あ、うん、ごめん……あれ？」

ショリンが首を傾げる。

「あんたこそ浮かれないでよ。ほりショリン、こんな奴の言つこと
は聞いや駄目よ」

アールが呆然としていたショリンを起す。

「あつ、そうだ！ ナスカに騙されたんだ！ ひどい！」

「確かにひどいな。ほら、エメリイからも謝つて」

「誠に申し訳ございま……つて、どうして私が？」

「だつて俺の保護者なんぢやないのか？」

「保護者ではありませんわよ！ ナスカ様の身を常に案じて、お守

りする役目ですわ」

「ならば今こそその役目を果たす時だ。ほら、あの黒髪ツインテー

ルがこっち睨んでる！ 怖いよつ、エメリイ！」

ナスカは怯えたふりをしながら、エメリイにしがみつく。

「ちょ……ナ、ナスカ様……抱きつかないでく、ださいまし……あ、
あの、アール様、ナスカ様が怖がるのであまり怖い目で見ないでく
ださいまし」

エメリイは混乱氣味にそう言った。

もちろんナスカが本気ではないことも、アールが別に睨んでいない
ことも分かっているのだが、ナスカの突然の行動に思考が働かなか
くなつたのだ。

「……この目つきは生まれつきよ、悪かったわね。もし私の目が睨
んでるように見えるなら、ぐだらないコントを見せられるせいかもね」

「何ですつて？」

「何よ、事実でしょ」

「うん、まあ事実だな」

「ナスカ様はもう少ししげがみついていてくださいま……いえ、黙つ
てくださいまし！」

「……もう、いいわよ」

アールはため息とともに歩き出す。

「どうしたんだアールは、機嫌が悪そつだな」「始まつたのかな？」

「何がだよ？」

「私は今、最中だよ」

「だから何のだよ？」

「うーん、ボクには君たちにどう対応していいか分からぬだけの
ように思えるけどね」

「そうか、それならいいんだが」

「うん、アールは悪い子じやないよ。この前夜怖くて眠れなかつた
時、一緒に寝てくれたよ」

シーリングが元気に言つ。

「そうだつたな。問題があるのはアールじやなくお前だつたな。い
い歳して何やつてんだお前。もしかしてまだおねしょとかしてんの
か？」

「してないよ！ 治つたもん！ 去年」

「……そうか、よかつたな」

ナスカはあまり突つ込まないようになつた。

「さあ、じゃあ真剣に行くか！ えっと、確か指令はフェンリル退
治だつたつけ？」

「はい、フェンリルは元々神狼でしたが、徐々に凶暴性を増して人
を襲うよつになつたと言います。肉食獣ですが、強さはオオカミの
比ではありません。大抵の魔法は通用しますが、とても打たれ強い
そうですね」

「うーん、オオカミの類なら夜行性かな。まあ、昼のうちに見つけ
れば簡単に倒せるかなな」

「そうだね、特に夜行性ではないようだけど、暗いところが好きだ
し、魔力を持つたオオカミだから、夜になると打たれ強さが増すみ
たいだね」

「そうか、じゃあ、昼の間に見つけよう

「仕切らないでよ」

「何を！俺の作戦能力は人一倍凄いんだぞ」

「それは前に聞いたわ」

「よし、じゃあ、トイネ、お前は風を感じるんだ」

「感じてどうするの？」

「いや、フヨンリルの気配とか何とか、そういうもののを感じたりとかだな」

「そんな事は出来ないよ」

「ええい、じゃあ、アールは雷を、エメリイは光を感じるんだ！」

「……」

ナスカの指示はアールどころかエメリイからもスルーされた。

「ねえ、私は？」

「ん？ ショリンはそこで反復横どび」

「うん！」

ショリンは嬉しそうに反復横どびを始める。

「ほら、ショリンはきちんとやつてるのに、お前らときたら…」

「そんなこと言われましても困りますわ」

「あー……。このファイナルドッグで、攻撃しても怪我しないんだつけ。

雷の一発くらいいいわよね？」

「……私には、それを止める術はありませんわ……」

「あるよ！ 止められるよ！？ 落ち着け、落ち着けってアール」

ナスカが後ずさる。

「あんたに魔法撃てば、すつきり出来るのよね。イライラするから思いつきり撃たせて」

「エメリイ！ 何とかしてくれ。今こそ守る時なんじゃないか？」

「申し訳ございません、ナスカ様。ナスカ様を思えばこそ、ここは一度痛い目にあつた方がよろしいのかと……」

「ト、トイネ！」

「うん、早く終わらせてね」

「ノオオオオオ！ ショリン！ 助けてくれ、あの怖いツインテー

ルが！」

ナスカは最後の手段であるシェリンに泣きついてみる。

「え？ な、な、な、わつ、きやつ！」

反復横とびをしていたシェリンは、突然の呼びかけにバランスを崩して転倒する。

「きやあああああああ！」

「シェリン！」

道の脇は急斜面、というよりもほほ崖になつてあり、シェリンはそれを滑り落ちていった。

「シェリーンッ！」

アールが叫ぶ。

その位置からは木が生い茂つていて下は見えない。呼びかけても返事もない。

「……まずいな」

「どうするのよ！ シェリンが！ シェリンが！」

興奮気味にナスカを責めるアール。

「落ち着け、最悪の事態でも、ここは仮想フィールドだ。シェリンは大丈夫だ」

「……分かつてるわよ」

そう言いつつも、その言葉にかなり落ち着きを取り戻すアール。

「ただ、この件は俺が悪かつた。俺が責任を取る」

「責任つてどうするのよ」

「俺が助けてくる。ここを動かないでくれ」

「ちょ……！ 待ちなさいよ！」

ナスカは、アールの言葉を無視して一人で走り出した。

「なるべく坂のならかなところを探すしかないな」

ナスカはあたりの地形を見回し、大体の見当をつけて、坂のならかそうな部分を探した。

元の位置からしばらく行ったところに、小さな下りの道があつた。

「ここなら何とかなるか」

ナスカはその道を下りる。

道と言つてもかなり急なため、急いで下りることは出来ない。更に下に行くにつれ、木の生い茂りが増え、昼間なのに若干暗くなっている。

「おーい、シエリン、いるか？」

谷底近くまで下り、薄暗い中でナスカはシエリンを探す。遠くまでは見えない。

そんな中、焦らずに先ほどシエリンが滑り落ちた場所の下と思われる方向に向かう。

「シエリン、いたら返事するな！」

「あ、ナスカ……え？ 返事しちゃ駄目なの？ じゃ、じゃあ……しーん」

少し前の方からそんな声が聞こえる。

「あそこか」

ナスカが声のする方へと行くと、そこにシエリンが座り込んでいた。

「シエリン、無事か？」

「う、うん、ちょっと足打つたから立てないけど」

シエリンが足首を押さえながら言ひ。

「ちょっと触るぞ」

ナスカは、シエリンの足首を押さえる。

「痛たた……」

シエリンの顔がゆがむ。

「うん、骨は折れてないな。捻挫だと思つ。自分で治せるか？」

「へ？ あ、私、水魔法使えるんだつた！ ……あ、でも、皮膚の怪我とか毒は出来るけど、骨とかはまだ出来ない……」

「そうか。まあ、とりあえずみんなのところに帰るか

「う、うん。でも、立てるけど、坂を登るのはちよつといいかな」「しようがないな、ほら」

ナスカはシエリンに背を向けてしゃがむ。

「うん……」

「つて、なんで足の裏つていうか靴の底を背中に乗せてるんだよ」「え？ 踏んで欲しいんじゃないの？」

「何故そういう結論に至ったか聞くのも面倒だから無視するが、とりあえず背負つて上まで登つてやるから乗れ」

「うん、分かった。ごめんね」

シェリンがナスカの背に体重を預ける。

「じゃ、行くぞ」

ナスカは立ち上がり、先程下りてきた坂を上る。
坂はかなり急で、上るのはかなりきつかった。

「大丈夫？ 重くない？」

「羽のように軽いな」

「え？」

「いや、エメリイが女の子を抱えて、重くないか聞かれたときにはそう答えるって言つてたからな」

ナスカは坂を上りながら答える。

「ま、でも全然重くないぞ」

「でも今日重い日だし……」

「そんな報告はいらん」

ナスカはそれでも坂の急さに息が上がってきた。

ナスカは騎士でも兵士でもなく、魔法使いなのだ。

「ね、ねえ、大丈夫？ 降りよつか？」

「大丈夫だ、多分」

「多分は大丈夫じゃないよ？」

「シェリンの癖にまともなこと言うな」

「ひどい！ ジャ、ジャあ、休憩しましょ、休憩！ わ、私がした
いの！」

「分かつた……じゃあ、休憩しよう」

上では残つた三人が心配しているだろうが、多少待たせてしまつ
のは仕方がない。

ナスカは静かにショリンを下ろす。

ショリンはひねつた足のほうを気遣いながら、ゆっくりとナスカの隣に座る。

本来は聞こえるはずの木々の梢は、ナスカの荒い息遣いに消える。「ごめんね、私のせいだ」

ショリンが申し訳なさそうに言いつ。

「いや、ショリンのデジに迷惑をかけられたことがないと言つたら嘘になるが、今回は俺のせいだ」

「え？ う、うん……あれ？ ナスカはいつも一言多くて、素直に受け取れないよ」

「まあ、すまないと思つてるのは事実だ。仮想フィールドだから、終わつたら何ともないだろうが、怪我をさせたし、打ち所が悪かつたら死んだかもしぬなかつた。さすがに調子に乗りすぎた」ナスカはいつになく、真面目な口調で言いつ。

「自分のせいで女の子に怪我させるなんて、帰つたらエメリイに説教されるな」

「……仲いいんだね、エメリイさんと」

「まあな。俺の保護者面するのはうつとおしこと思ひばど、俺を色々な部分で守つてくれているのもあいつだからな」

ナスカはかなり息が落ち着いて来るにつれ、木々のざわめきが耳に蘇る。

「あのや、ナスカはエメリイさんのこと……」

「しつ！ 何かいる！」

ナスカがショリンを制し、辺りをうかがう。

それほど遠くない位置から、咆哮が聞こえてくる。

「まずいな」

「なに？ どうしたの？」

ショリンが小声で聞く。

「分からぬが、獣のうなり声が聞こえる。状況から考へると、多分フェンリルだ」

グルルルルルルルル

明らかにこちらを認識しているであらう獣の警戒の唸り。

「どうしよう、大声上げればみんな来るかな？」

裏つきそうだ

薄暗い闇の中からこちらを警戒しながら近づいて来る獸。

助けは呼べない、動けないシェリンを背負つて逃げる」とは難し

卷之三

形跡は残つてしまふ。

ウオオオオオオオオオン！

「めざせ！」

シエリンがしがみつく。

恐怖で震えるショリンを背にしながら、ナスカは立ち上がり、フエンリルと対峙する。

「ああああ、もうどうでもなれー。」

ナスガは炎魔法を発動する。

ジエリンの教科書を見て理論だけは知っている魔法た
自分の部屋で騒くながら乗つた二ことがある。

火に方向性を持たせて、勢いで相手にぶつける魔法。

火は一箇所に止まると、酸素供給が追いつかず、ある程度の炎で安定するが、勢いをつけることで移動先の酸素を供給させ、勢いを増す、と教科書には書いてあつた。

だが、部屋で試したところ、速くすればするほど、炎が空氣で冷やされ、火は小さくなつていつた。

「だが、最大の炎なら大丈夫だ！ 多分」

「た、多分は大丈夫じゃないよ！？」

「それでも、大丈夫だ！」

ナスカは大きな火の塊を集結して小さくさせる。

中心はかなりの高温になるだろうが、酸素不足の状態になるので長くは持たないだろう。

「行くぞフェンリル！」

それに勢いをつけて、フェンリルに飛ばす。

その塊は高速でフェンリルに向かい、そしてどんどん大きくなつた。

ドゴオオオオオオオオ

炎の塊は、爆発的な勢いでフェンリルにぶつかる。
その勢いはナスカの想像以上だつた。

「きやあ！」

ナスカの足元に座つているシェリンがナスカの足にしがみつく。
光で何も見えない状態が一秒。

晴れていく視界に映るのは、紅く焼けた山肌。

そして、焼け焦げたフェンリル。

フェンリルは身動きをしない。

「やつたのかな……」

ナスカはようやくほつとして座り込む。

シェリンが呆然と焼け焦げたフェンリルを見つめている。
思つた以上の効果。

ナスカはこれに嬉しさよりも戸惑いのほうが今は大きかつた。

「これ……俺がやつたのか……」

フェンリルの周囲だけでなく、大きくなつた炎の塊が、途中から

山肌を焦がしていた。

今になつてやつと、紅い残り火は消えたものの、焦げ臭い空気が辺りに充満していた。

「大丈夫ですか、ナスカ様！」

「シェリン、大丈夫？」

程なくして、上で音を聞いていたであろう三人が、慌てて駆けつけてくる。

「！ これは……」

アールがこの惨状を見て呆然とする。

彼女だけではない、エメリイも、トイネですら、目を見張つて焼け焦げた山肌とフェンリルを見つめている。

「あー……」

もはや誤魔化しはきかない。

この状況で自分達がやつてない、と言い逃れることは不可能だろう。

三人の目も、一体何が起きたのか、という説明を待つていた。

「……凄いぞシェリン」

「へ？」

「こんな技が使えたんだなシェリン！ 使えないとか言って悪かつた！ お前は凄い火の魔法使いだ！」

「え？ え？ ええええええ！」

戸惑うシェリン。

「いやあ、凄かつたぞ、シェリンは。咄嗟になるとあんなことが出来るんだな！」

「……シェリンがやつたの？」

「え？ あ、う、うん、そうみたい……」

シェリンは戸惑いながらも、そう答えた。

「凄いじゃない、シェリン、一人でフェンリル倒すなんて！」

「う、うん、強かつたよ？ 多分は大丈夫だったよ」

喜ぶアールと、戸惑いながらそれに合わせるシェリン。

それを見ながらほつとするナスカと彼を気遣うHメリイ。
これで何とか課題終了というところだ。

「ねえ、ナスカくん」

トイネが小さな声で、ナスカに話しかける。

「ん？ 何だ？ 僕だけが役立たずだと言いたいのか？」

「そんなことどうでもいいよ」

「否定はしないのか」

「それよりさ

」

トイネは、更に声を落として、座っているナスカの耳元に囁くよう言う。

「本当は、誰が倒したの？」

「！」

ナスカはトイネを振り返る。

顔が近くて危うくキスしそうになる。

トイネはいつもの飄々とした笑みを浮かべていた。
「何が言いたい？」

「別に。ただ、本当のことが知りだかつただけだよ
トイネがどこまで何を知っているかは分からない。
だが、元々頭のいい生徒であるのは事実だ。
何かを感じているのかもしねれない。
「別に何もないさ」

ナスカは立ち上がる。

「シエリンの、俺を助けたいっていう愛の力が、奇跡を起したんだ。
な、シエリン？」

「え？ えええええええええ！」

「ナスカ様、何をおっしゃっているんですのー…

シエリンやエメリイの声を背に、ナスカは坂を駆け上がって行った。

第一節

「あれで行こ」
ナスカが言うと、ショリンがきょとん、とした顔をした。
放課後の教室。

いつものように、ナスカとショリンが一人きりで教科書を交換していた時の話だ。

「うん、分かった」

ショリンも力強くうなずく。

「あれはいいやり方だと思うんだ、お互いにメリットあるしな」「うんうん、ホットケーキはやっぱりハチミツだよね！」
一人の意見が思いつきり割れた。

「お前は何の話をしているんだ」

「え？ これから何か食べに行く話じゃないの？」

「どうして今まで一度も一緒にどこか行ったことないのにやつと思つたんだ」

「たまには行こよ。学校のそばにおいしいカフェがあるんだよ！」「うん、まあ行くのは一向に構わないが話をそらすな」

ナスカがホットケーキに傾きかけた話題を戻す。

「この前の演習でフェンリルを倒した時、俺が倒したんだがショリンがやつたことにしただろ？ あれって有効な手段だと思うんだよ」

「？ どういう事？」

ショリンが首を傾げる。

「だからさ、俺が魔法使いたいと思ったとき、俺が使うとあいつらに俺が火の魔法使うことがばれるし、お前もやうだろ？」「うん、せっかく覚えた水の魔法、使うところがないね」

「だからさ、例えば俺が使うふりをしてお前が使うんだ。で、俺が水魔法を使ったことにしつつ、実はお前が使うんだよ」「……分かりやすく言うと？」

「これ以上シンプルには言えん。まあいい、一度やってみよつか」
ナスカが立ち上がる。

わけが分からぬまま、シェリンも立ち上がる。

ナスカはシェリンの後ろに回り、後ろから右腕をつかむ。

「え？ な、何……？」

「ちょっとさ、指を立てて『えい』とか適当な事言いながら右手振

つてみてくれ

「う、うん……えいつ！」

シェリンが右腕を振ると、その指先辺りから、炎が飛び出し、どこかに当たる前に消えていった。

「…………」

「やりたいこと、分かつたか？」

「わ、私……」

シェリンが戸惑いながらナスカを振り返る。

「火の魔法使っちゃつた……！」

「……お前はすぐえなあ」

ナスカは時間をかけてシェリンに説明をした。

「じゃあ、行くよ、キュアー！」

「だから、お前はものを言つなって！」

「う、うん……」

結構な時間を費やし、何とか不自然ながらも、まし程度に使えるようになってきた。

「じゃあ、もう時間だから最後な

「分かった。……でも、これってこんなに密着しないと出来ないの？」

シェリンは少し恥しそうに言つ。

本当に魔法を使う側は、魔法を使っていると見せかける側のぴたり後ろにくつづくか、真横にくつづいている。

傍から見ていると、仲のいいカップルが、いぢやいぢやしながら

魔法を使っているようにしか見えない。

「そりや仕方がないな。離れたところから魔法を使つたらすぐにばれるだろ」

「う、うん、そなだけ……エメリイさんとか、怒らないかな？」

「エメリイが？ どうして？」

「……いいよ、分かつたよ、頑張るよ」

「じゃあ行くぞ、それキュー！」

ナスカの声が、誰もいない教室に響いた。

ナスカは久々に、学外のカフェにいた。
彼が学外に出ることはあまりない。

大抵のことは学校と寮で事足りるからだ。
だが、シェリンなど女学生は、寮に住んでいても頻繁に外に出る。
それは彼女らにとって普通でもあるし、一般的なのだろう。
ナスカは友達も多いほうだが、あまり遊びに行くことはない。
それは放課後にはエメリイを送るというワンステップがあるため、
他の生徒は誘いにくく、更にエメリイが無言のガードをしているため、何となく割り込みにくいのだ。

更にナスカは外にあまり興味もないため、必然的に外出しなくなるのだ。

「で、ここメニューのお勧めは何だ？」

「えっとね、ホットケーキのハチミツ増量生クリームのせと、オレンジジュースハチミツ入り」

「言い間違えたな。人間向けのお勧めは何だ」

「人間向けのお勧めだよ！？」

「シェリンとは多分違う種族なんだと思つ」

「一緒だよ、多分！」

「まあいい、ホットミルクでも注文しようか……何だこれ、オプションつきって書いてあるぞ」

「え？ 本當だ、そんなの注文したことないけど……あ、この前他のお客さんが何か注文してて、『ママのおっぱいしゃぶつてなとか言われてた！』

「なにい！ それは注文しなきゃならないなー マイドリームのために！」

「そんなドリーム捨てればいいと思うけど、好きにすればいいよ」そんな会話をしていると、ウエイトレスが一人の席に来た。

「いらっしゃいませ、ご注文は？」

ちよつときつめの目をした女性で、大人の色氣を漂わせている。

「えっと、私はホットケーキのハチミ……」

「俺、ホットミルク！」

わくわくが止まらないナスカは、子供のような期待に満ちた目で、

注文をする。

「……ホットミルク？」

ウエイトレスは、少し馬鹿にしたような言ひ方。期待のまなざしでウエイトレスを見るナスカ。早く終わらないかな、という表情のシェリン。ちらり、とシェリンを見るウエイトレス。

「 恋人のおっぱいでもしゃぶつてな」

そう言つと、ウエイトレスは去つて行つた。

「恋人？」

「ええ？ エエエエ！ 私！？」

一瞬で真っ赤になるシェリン。

「……まあ、そう見えて仕方がないな」
ナスカも少しだけ目をそらす。

「あ、あの、ごめん……まだ出ないから……出るよくなつたらあげるから」めんね！」

胸を押さえながら半泣きのシェリン。

「いや、言葉通りに取るな、余計に恥ずかしい」
その後、もう一度注文を取りに来てもらつた。

「そういえばトイネって普段からあんな感じなのか?」
「ナスカがトイネの事を聞いてみる。」

「あの中で一番の要注意人物といえばトイネだろう。
この前も感づいたような素振りがあつた。」

「うん、大体落ち着いてて、二コ二コして、でも何でも分かつて
て、色々教えてくれるよ」

「ほう。トイネの魔法つて、まだ見たことないけど、やっぱり凄い
のか?」

「うん、結構大きな風を起せるよ! 風の流れを変える事も出来る
みたい。でもね、体力がないからずっと魔法を使つてるとすぐ疲れ
ちゃうみたい」

「体力ないのか。まあ、仕方がないな。あの背格好での食生活だ
しな」

トイネは基本的に子供のように小さい。

太つてもいらないし筋肉もないのに、それこそ本当の意味で羽のよ
うに軽い少女だろう。

魔法はそれほど体力を使うわけではないが、それでもある程度の
スタミナが必要であるし、集中力もいる。

人は集中すれば体力を消費するので、当然スタミナも消費する。
それが彼女はないのだ。

「そこがあいつの欠点といえば欠点なのか……」

「そうなのかな? あと、この学校にお兄さんがいて、お兄さんに
ずっと魔法を習つていたから、あのレベルになつたと言つてたかな
「へえ、つてことは黒魔法科の風属性なのかな?」

「違うとか言つてたよ。よくは知らないけど……」

「風魔法以外の人間が教えてどうにかなるものなのかな?」

「知らないよ、トイネがそう言つてただけだから。でも今でも二人

とも寮に入つてゐるけど、よく会つて話をしinらしくよ」

「俺は兄弟いなきからよく知らないが、俺らの年代つてあまり兄弟で会つたりしないんじやないのか？ 特に男女となると」

「うん……私もお兄さんいるけど、会つたりしないね。でも嫌いじやないよ、学校にいるから会えないだけで」

「まあ、ショーリンやトイネが普通に当てはまるかといひとやうでもないからな」

「私は普通だよ？」

「はつはつはつ、面白い冗談だ」

「ひどい…」

半泣きになつたショーリンは、やけ食いのようにはホットケーキを食べ始めた。

ナスカはゆづくつとホットミルクを飲み干した。

この学園に、寮は四つある。

元々仲の悪い白魔法使いと黒魔法使いが合同で作った施設ではあるが、それぞれの子弟のために、威信をかけてそれぞれが豪華な寮を建築したからだ。

これが白魔法科と黒魔法科の更なる分断の火種にはなつてゐるのだが。

同じ男子生徒でも、科が違えば寮が違う。

つまりところ、仲がよくなる一つの機会を失つてゐるのだ。

これが、両陣営の威信をかけているため、非常に豪華で広い。

白魔法科の男子などはそもそもその生徒数が少ない上、貴族が多く、寮に入らない生徒も多いが、黒魔法科に匹敵するような広さとなつてゐる。

それを開けておくのもつたないので、白魔法科や黒魔法科以外の生徒は基本こちら側に入寮している。

基本的にこの学校は白魔法使いと黒魔法使いが合同で作った研究施設の一つであるが、その研究結果により、新しい魔法が生み出される事もある。

それらの魔法を学術にフィードバックし、生徒に教えるのがそういう少数学科なのだ。

だが、基本的にそのような学科は一クラスの人数も少ないのが現状で、だからこそ、それでも過剰な寮は十分人が収容できた。

ナスカはこの寮のロビーが好きだった。

無駄に広く豪華な上、ほとんど人がおらず、大きな空間でのんびり出来るからだ。

なんだか王侯にでもなったような気分になる。

「うむ、よきにはからえ」

誰ともなしにそう言うのがナスカの口調だった。

「ん？ 呼んだかい？」

だが、その日はたまたま他にも人がいた。

細いがすらりと背が高い男子生徒。

知性漂う目でナスカを見ている。

「いえ、いつもの事なのでほつといてください」

「そうか……君は白魔法科の生徒かい？」

「え？ まあ、ここにいるって事はそうですけど」

「そうか。ふむ……もしかして君はナスカ君かい？」

「へ？ まあ、そうですけど」

「そうか」

その男子生徒は立ち上がる。

「残念ながら、僕はここにいるが、白魔法科ではないんだ」

「ああ、そうですか、そういうえば別の学科の人もいるんでしたつけ」

「僕はミトルネルヴィ。ミトネと呼ばれている。精靈魔法科の一年

だ

「ですか……あれ、ミトルネルヴィ……ミトネ……？」

ナスカは、その名前に妙に聞き覚えがあつた。

「どこかで聞いたことがあります、覚えてません」

「多分、君はトイネルヴィと聞いたんじゃないのかい？」

「ああ、そうだったかも……あれ、もしかして、トイネの？」

「そう、僕はあの子の兄だ」

知的な微笑み。

確かに同じ血を引いていそうだ。

「ま、妹をよろしく頼むよ。あの子はいつも余裕があるように見えて、実はそんなに精神が強い子じゃないからね」

「はあ」

ナスカはトイネを思い起^レし、確かにそんな面がありそうだな、と思つた。

ミトネはじつとナスカを見つめる。

「……何ですか？」

「ふむ、君はとても火の精靈に愛されているな」

「！」

ナスカは警戒する。

彼が火の属性を使うことを知られたら、まずい。

今のは会話を誰かに聞かれていないか、周囲を見回す。

「まあまあ、誰にも言つたりしないよ。ただ、僕らには見えるってことだけは覚えておいた方がいいよ」

「……はい、でも、どうして見えるんですか？」

「それは僕が、精靈魔法科の生徒だからさ」

「すみません、俺、精靈魔法科のことあまり知らないので」

「そうだね、知らない人もまだ多いから仕方がないね。時間があるなら簡単に説明するけどどうする？」

「それじゃ、お願ひします」

ナスカは辺りに人がいないことを再度確認してそう言った。

精靈魔法、といふといふにも特殊な魔法のように思えるが実はそうでもない。

古来からある白魔法や黒魔法、これらは全てそもそも精靈魔法な

のだ。

全く別に進化を遂げてきており、彼らはそれぞれ自分の属性の元素を操ることで魔法を使っている、と思っていた。

だが、それは誤りで、実際は自分の属性の精靈を操っていたのだ。魔法使いの言ひ属性とは、その魔法使いが、その精靈に好かれているかなのだ。

それが最近の研究で分かつてきのことだ。

ただ、分かつたところでそもそも精靈は見えないので、何も変わらないように思える。

だが、そうでもないのだ。

逆に考えてみよう、では何故見えないはずの精靈が発見されたのか。

見える人間が存在するからだ。

魔法使いの中で、非常に少数の人間に限定されるが、精靈を見えたり感じたりする人間がいる。

今のところどう修行すればそつなるのかは分からず、大抵は先天的に見えていた者のみが見えるだけだ。

精靈魔法科はそのような先天的に見える者たちの集まりである。精靈が見えるということが何のプラスのなるのか。

これは実はかなりの利点になる。

普通の魔法使いは、見えない精靈を何とかして動かしている。新しい魔法を研究するのも、どうすればどうなるかという研究を繰り返してやつと見つけられるのだ。

まさに群盲が象を撫でる状態だつたのだ。

だが、彼らはそれを一瞬で象であると判断し、また、見えるので、何をすれば全体としてどう動くかが理解できる。

つまり、一般的の魔法使い達が百年かかる研究を、彼らなら数日で出来てしまうのだ。

そしてそれは、研究だけでなく、通常の魔法に対しても有効である。

精靈が見えるということは、どうすればより効率的に魔法を使うのかを理解できるし、他人をも指導できる。

「つまり、トイネはミトネさんが指導したんですね？」

「そうだね、あの子は勉強はかなりできる子だつたけど、魔法はからつきし出来なかつたんだけど、僕が精靈を見ながら指導したら、あそこまで出来るようになつた。ただ、その成果ちょっとアンバランスになつてしまつたかな」

「あいつはアンバランスなんですか？」

「そうだね、総合的な風魔法使いとは言えないところはあるね。元々それほど風の精靈に好かれていないところを無理やり使つてるから」

「はあ、よく分かりませんが、そうなんですか？」

ナスカはそもそもトイネの魔法を見たことがないので、それ以上は何も言えないが、彼女は優等生で通つてるので言つほどのアンバランスでもないんだろう、とも思った。

「君は、とても火の精靈に愛されている。これは血筋かな？
親御さんは高名な火の魔法使いなのではないかな？」

「いえ、俺の親父はガチガチの白魔法使い、水魔法の高名な使い手ですよ」

「ふむ、お母様は？」

「あー。俺、母親いないんですよ。親父に聞いても何も言わないから、死んだのか別れたのか分かりませんが」

「そうか、それは悪いことを聞いたね」

「いえ、最初からいいから悲しいとか寂しいとかそういうことはないんですよね。エメリイ　俺の友達もよく気を遣うんですけど」

「そうか。ただ、精靈というのはなぜか血縁というものが大好きだ。君の血縁に火の魔法にとても愛された人がいると思う。君が更に火に愛されたいなら、その人に会つのも一つの手だと思う」

「はあ、俺の知る限りは火の使い手はいませんが、探してみます」

「うん、じゃあ、僕はこれで失礼するよ」

ミトネは片手を上げながら、ナスカに背を向けた。

ナスカは彼がいなくなるまで見つめていた。

「うーん、あの人人が人に言うとは思えないが、トイネにくらいは言うかな。いや、逆にあの人人が来たのはトイネの差し金かも知れないな……」

ナスカは腕を組む。

「ま、トイネが悪い奴かと言えば、そんなことは全くないんだがな。いつそ打ち明けて味方にするか、知らないを通して誤魔化すか……だが、こっちにはシェリンという死ぬほどあつさりばらしそうな奴もいるし、さつさと仲間にしておいた方がいいかもな。ま、いいや、今日は寝よう。何とでもなるだろ」

そう言つと、ナスカは一つ伸びをして、自分の部屋に戻つた。

第二節

「えー、今日の演習はマカロフュロを倒すんだつけ？」

一度田の演習はすぐに行われた。

仮想フィールドを歩く五人。

今回は森林ではなく、今回は平原の一本道だ。

「そうですね、今日は場所も最初から分かつてますからばぐれる心配はありませんわね」

エメリイが言う。

今回は探すところ必要がなく、一本道の先の山に棲んでいる、といふことは分かっている。

「とりあえず野営だ、シヨリン、準備！」

「もうそれはいいわよ！」

シヨリンが反応する前に、アールに止められる。

「マカロフュロは強敵だから油断しないでよね」

「そうだね。本当の世界では結構マカロフュロに殺されてる人多いみたいだし」

「そ…… そうなの？」

シヨリンが身を竦める。

「ま、対処法さえ間違わなければ何とかなると想うけど、チームワークが必要だな」

ナスカが軽く言う。

「シヨリンはマカロフュロについて勉強してきたのか？」

「う、うん、一応見ては来たけど、よく分からなかったの」

「駄目だなあ、シヨリンは」

「駄目じゃないよー、何とかするよー」

「どうやつて？」

「えっと、ん……ハチミツをかける？」

「せめて魔法を使えよ。つていうか、持つて来てるなよ、ハチミツ」

「まあまあ、ボクが簡単に説明するよ」
トイネが説明を買つて出る。

「ん、まあ、じゃあ頼むかな」

ナスカは、様々な言動から、トイネに注意深くなつていた。
だが、だからと言つてチームワークを乱すわけにも行かない。
彼女の好意は受け入れたいと思つている。

トイネの説明は概要するところだ。

マカラフュロは、基本的に一足歩行のモンスターである。
全身が硬い皮膚で覆われており、ほとんどの物理攻撃は通用しない。

通常の生物は、固い部分があつたとしても、裏は弱点であつたり
するものだが、マカラフュロは全身なのだ。

皮膚は電気を通さないため、電撃でも駄目だ。

このモンスターは食べるということに大きな執着があり、生きて
いるものならほぼ何でも食べてしまう。

その口が、マカラフュロは一つあるのだ。

第一の口は、普通の口がある位置。

大抵のものはここから食べる。

更に、胸の位置、胃に直結している大きな第一の口がある。

こちらはオオカミ程度の獸ならひと飲みにしてしまつくらいの大
きさだ。

飲まれたらそのまま胃液で溶かされてしまう。

だが、こちらの口はほとんど開くことがない。

この口こそ、マカラフュロの弱点だからだ。

全身硬い皮膚で覆われ、第一の口から食道にいたるところまでも、

どんな食べ物でも受け入れるように硬くなっている。

だが、胃と直結している第一の口の内部だけは内臓の中であるた

め、弱い。

「だからこの、下の口を攻撃すればいいんだけど、ガードが堅いんだよね」

「へえ、下の口はいつも固く閉じてるんだね」

「下のお口を開くには、上のお口を執拗に攻めるとよろしいんですね。そうすると下のお口がお留守になるんですわよね」

「そうね、執拗な攻撃で下の口からよだれが垂れて濡れ始めたら、無理やりこじ開けて、熱いのを一発撃てばいいのよね」

「……お前らお願ひだから第一の口、第一の口と言つてくれませんかねえ!」「? どうかしたの?」

ショリンの、いや、四人の、心からの不思議そうな目を向けられるナスカ。

「いや、もういい」

何だか色々なものがどうでもよくなつた。

「場所はここから大して離れてないところだよな」

「そうだね、もう着くよ」

「じゃ、早めに行くか」

ナスカは歩を早めた。

「これが、マカラフエロ……か……」

ナスカが、誰ともなしに言つ。

グオオオオン!

マカラフエロの咆哮。

木々をなぎ倒す巨体。

歩を進めるたびに、どしん、どしん、と地響きがする。

「こ、こんなに大きいの?」

震える声のショリン。

マカラフエロは、五人が想像しているより、遥かに大きかつた。想定外の事態に足がすくむ。

途方にくれ、逃げ出しかねない四人を見て、どうも自分が何とか

しなければならないな、と感じるナスカ。

彼は周囲とマカロフェロと、四人の位置をそれぞれ確認した。

「あー、トイネは正面からあいつをなるべく近づけないよう風で拘束してくれ、アールは右から顔を攻撃、エメリイは左から目に光を当てる、各個攻撃されないようにこうにぼらけるんだ！」

「え？ わ、分かったわ！」

「分かりましたわ」

「大丈夫、これ以上近づけないはずだよ」

「俺とシェリンは後衛で、シェリンは後ろから攻撃、俺は怪我した奴を治して行く」

「え？ よ、よく分から……」

「いいから下がれ」

ナスカは問答無用でシェリンを抱えて後衛に回り、彼女の後ろから彼女の両手をつかむ。

シェリンの後ろからぴったりくっついて、練習と同じスタイル。

「シェリンも魔法！」

「え？ あ、ええ？」

ナスカは戸惑うシェリンの手首をつかんで手を上げさせ、適当に魔法をぶつける。

どうせ前衛はマカロフェロしか見ていないので、多少ずれていても気付かないだろう。

「…………」

だが。

多少余裕のあるトイネが、ちらり、と振り返った。

「トイネ、前向いてバランスが崩れないように集中してくれ！」

「わかってる」

トイネはすぐに前を向いた。

ヴォオオオオオオオオ！

より強い咆哮。

それとともに、第一の口が少し開き、涎がたらり、と垂れた。

「今だ！、アールとシェリンは第一の口を攻撃！」

機能していないシェリンを抱えながら、ナスカが魔法を撃つ。ほぼ同時にアールの魔法がマカロフH口の第一の口を貫く。

ヴウウウウウウウウ……

唸り声とともに、力をなくして行くマカロフH口。やがて、大きな地響きとともに大地に倒れた。

「ふう、何とかなったかな」

「お疲れさま」

「お疲れ様でした……って、ナスカ様！？」

驚いた声を上げるエメリイ。

アールやトイネがナスカを振り返ると、そこにまばたいて見てもシェリンを後ろから抱きしめているとしか思えないナスカの姿があった。「あんた、どさくさにまぎれて何やってんのよ！」

「いやいや、違うぞ、あのな、えっと……シェリンが倒れそうだったから支えてただけだ」

「本当なの、シェリン？」

「…………え？ あれ？ 終わったの？ なんか、頭がぼーっとしてたら終わってた……」

「だな！ 慣れない魔法使って疲れたんだよな！」

「えっと、ナスカが後ろから手を押さえるからなんだかぼーっとして……」

「そつかそつか！ じゃ、帰つて休もう、な？」

ナスカは強引に押し切った。

「じゃ、これで終了！ 帰るうか

「何であなたがリーダーみたいに仕切つてんのよ、さつきもそりだけど

アールは少し怒り気味に言つ。

さつきとは、戦闘中のことだろ？

ナスカが指示を出したことが気に入らないようだ。

「いや、リーダーじゃないけど、他にやることなかつたしな。何か問題あつたか？」

「少なくとも今回は的確に誰が何をするか言つてくれたおかげでうまく行つたところはあるよね」

トイネがナスカに助け舟を出す。

「そうですわ、ナスカ様の策士能力は抜群ですよ」

「……今回それでうまく行つたのは分かつてゐるわよ」

アールがさつきより小さな声で言つ。

マカロフエロを前に、なすすべなく立ち尽くしていたアールは、ナスカが的確に何をすべきか導いてくれたからこそ、うまくいったことは理解している。

だからこそ悔しかつたのだ。

「でも、だからと言つて今後も仕切らないでよね、あんた結局何もしてないじゃないの？」

「ああ、分かつてるよ。でも、それは誰も怪我人が出なかつたって事だからいいじゃないか。治癒の魔法なんて、使わないに越したことはないんだよ」

ナスカが言うと、「あんたその魔法が使えないんじゃない」などとぶつぶつ言つていたが、さつさと現実の世界へと帰つてしまつた。

「私たちも帰りましょう、ナスカ様」

「ああ、悪い、ちょっと用事があるから先に行つてくれ」

「？ 分かりました……」

エメリイは不審に思いながらも、帰つていく。

「シェリンもさつさと帰れ」

「…………うん」

いつもなら何か言い返してきそうなシェリンが、元気なさげに帰つていった。

「何だあいつ？」

「さあね、今回全く役に立てなかつたことを氣にしてるんじゃないかな」

「……そうだな」

ナスカは、トイネの言葉を軽く流した。

アルやエメリイから見れば、今回シェリンが役に立つていなくて思つてはいない。

だが、トイネは背後から火の魔法を撃つていたはずのショリンを「役に立つてない」と言ったのだ。

「ねえ、ボクだけ残したからには何か用事があるんでしょ？ 早く言つてよ。あ、ボクと付き合いたいって言うなら、まあ、ナスカくんなら考へてもいいよ？」

「ん、ああ、そういう事はもつと大人になつてからな」

「ボクはナスカくんと同じ歳だよ。ボクって魅力ないの？」

「いや、そんな事ないぞ。世の中には色々な趣味の奴がいてな」

「その時点では魅力ないつて言われてるよね。ま、ナスカくんの近くにはエメリイさんとかショリンとか、魅力的な子が多いから仕方がないか」

「あいつらはあんまり関係ないんだが」

「そんな事ないよね、さつきもみんなが一生懸命戦つてたのに、ナスカくんはシェリンを抱いてたし」

「抱いてたとか言うな、支えてたんだよ」

「そうだね、そうじやなきや駄目だつたんだよね」

「……トイネは、知つてるんだな？」

ナスカはトイネに核心を訊く。

「知つてるつて、何を？」

「だから、俺とショリンが」

「ナスカくん」

ナスカの言葉を、トイネが止める。

「もし、ボクが知らなかつたら、これで知ることになるんだよ？」

トイネは、いつもの様に軽い微笑とともににわつ語つた。

彼女は頭のいい子だ。

何か知つてゐる風を装つて情報を話させることなど容易だひだつ。

「……構わないさ」

「どうして？ 人に知られちゃまずいことなんでしょ？」

「トイネは他人に言うような奴じやない。ショーリンが他人に言つてしまいそうになつても守つてくれるはずだ」

ナスカは、自信を持つてそう言つた。

トイネと出会つてからまだ間もない。

トイネを底が計り知れない奴だとも思つてゐる。

だが、人を裏切るような奴ではない。

それだけは確信を持つて言えた。

「それにな

「うん？」

「知つてゐるか知つてないか中途半端な状態で、あれこれいちいちからかわれるのがうつとおしくて仕方がないから、もづばらした方がいい」

「ナスカくんらしい考えだね。ごめん、ボクもからかい過ぎたよ」「ま、それがトイネだから仕方がない。そんなトイネは結構好きだぞ？」

「……もう、ボクはからかわれる事には慣れてないんだからね」

トイネは少し頬を染める。

「ん？ からかつた覚えはないぞ？」

「もういいよ。ボクはナスカくんとショーリンのこと、人には言わないし、シェリンを出来る限りサポートするよ」

「ああ、悪いな」

「いいよ、仲間だしね」

トイネはいつも以上ににっこりと笑つた。

「じゃ、俺らも帰るか。あまり遅いとあいつらに怪しまれる」

「大丈夫だよ、その時はボクが泣きながら『ナスカくんが、無理や

り……』って言えばみんな遅かったことを納得してくれるよ

「納得されても困る！」

ナスカとトイネは、そんな軽口を叩きながら、元の世界へと戻つていった。

「ん？ ショリン？」

元の世界に戻ると、ショリンが一人立っていた。

いつもとは感じが違い、暗い表情でうつむいている。

「トイレ行きたいのにもう動けないのか？ 出てつてやるから」
ですか？」

「あのや、ナスカ……」

いつもなら反応してくる言葉も無視して、真剣な表情のまま、シエリンが口を開く。

「私、今日は何も役に立てなかつたよね？ そのせいでナスカが責められて……」

「ストップ！ トイネがいるんだぞ、場所を選べ」

ナスカはショリンを止める。

そして、トイネに耳打ちをする。

「あのさ、トイネが知つたことを教えると、こいつ絶対ボロ出しそうだから黙つてることにしよう。あと、ちょっと話してくるから」

トイネは黙つてうなずいて出て行つた。

ナスカは、ショリンをいつも空いている教室へと連れて行つた。
「で、何だつて？ お前が役に立たないからつて誰もお前を責めないだろつて事でいいのか？」

「ただけど、私が役に立たないと、責められるのはナスカなんだよ？ でも、ナスカが役に立つた分、私が役に立つことになつて……ナスカには本当に悪いことしてるのかなつて」

ショリンは泣きそうな声で言つ。

「そんな事いちいち気にするなよ。お前が役に立つて事はどうことだか分かつてるのか？」

「え？ えつと、水の魔法が役に立つ時は……」

「誰かが怪我したとき、毒に侵された時そんな感じだろ？　まあ、泥水を綺麗にするとかもあるけどそれは別にして」

水魔法は極めれば攻撃にも使えるし、それこそ風魔法に近いくらいのポテンシャルはある。

だが、ショーリンが使える範囲で言えば、傷を治す、毒を体外に出す、あと簡単な水操作くらいだ。

「うん……そのくらいかな」

「お前が役に立つ時ってのはな、誰かが怪我をしたり、毒に侵された時なんだよ。そんな時は来ないに越したことはないだろ？」

「うん、そうだね」

「まあ、これから誰も全く怪我をしないって事は、もちろんないと思つが、出来る限りそくならないようにしたい。でも、万が一が起こつた時にはお前の出番なんだよ。お前がいるから、安心なんだよ俺達は」

「安心……？」

夕暮れの教室。

戸惑つた顔のショーリン。

「お前はそういう存在でいればいいんだ」

「で、でも、ナスカが役立たずって思われるよ？」

「そんなんもん気にしなくてもいいし、今言つたこと回りじりと言えば済むことだろ？」

「……いいのかな？」

まだ少し躊躇があるショーリン。

ナスカはショーリンの頭に手を置いてやる。

「気にするな、あと、ショーリンの癖に真剣に悩むな

「ひどい…」

「生意氣だぞ、ショーリンなのに」

「私そのものが否定された！　もう、今日のホットケーキはナスカのおじりに決定だよ！」

「ちょっと待て、どうしてナチュラルにカフュに行くことが確定し

てるんだよ」

「そんな事はどうでもいいの！ 私は今日三段ホットケーキをナスカのおじりで食べる！ それだけ」

「三段つて食べ過ぎだろ、腹と同じだけ食べなくてもいいだろ？」

「ひどい！ 私三段腹じゃないよ、ほら！」

ショリンは制服のブラウスを上げ、腹を出す。

「こんなところでブラウス上げるな！ 分かったって、おじるから！」

「本当？ やつた、言ってみるもんだね！」

夕暮れの教室、飛び上がって喜ぶショリンのブラウスが、またふわり、と上がった。

第四節

「くつ、最大の雷激が効かないわ」

「アール下がれ、アンデッドは通常攻撃では四肢を破壊して戦闘不能にするしかない」

「分かつてゐるわよ……！」

アールが悔しそうに後ろに下がる。

ここには仮想空間の忘れられた古びた墓地。

誰かの呪いによるものか、自然発生的なのか、ここにゾンビや「アーストが出る、という『設定』の空間。

それを全滅させることが今回の課題だ。

とりあえず墓場に来たところで、腐りかけの肉体で動き回るゾンビが数匹現れたのだ。

腐りかけた筋肉で歩くため、ふらふらなのだが、何かの魔力か靈力か、転んでも立ち上がり、もの凄い力を持っている。

更に、どれだけ痛めつけても、四肢さえ無事であれば立ち上がってくる。

「既に『死んでいる』者は殺せませんわ」

エメリイがつい、と前に出る。

彼女が手を掲げると、その先に光の珠が現れる。

それは徐々に光度を増し、視界を奪っていく。

「還りなさい」

よく通る声でエメリイが言うと、光は弾ける。

そして、ゾンビたちはばたばたと倒れ、動かなくなつた。

「彼らに必要なのは再び眠らせてあげることですわ　まあ、野蛮な方には分からない」とじょうね

振り返るエメリイ。

「な……によ」

腹が立つたが、何も出来なかつた自分にも悔しさがあるためそれ

以上何も言えないアール。

「こら、エメリイ、そんな事言つなよ」

「ごめんなさい、言い過ぎましたわ。まあ、今回は私にお任せになつて遊んでてくださいまし」

エメリイが笑う。

それが更にアールをイラつかせる。

「あー、どうしようもならないかなあ、あいつら

ナスカがつぶやく。

ナスカは、エメリイが妙に浮かれているのは分かつていて、一応最初の喧嘩は収まつて、アールとは仲良くなはないが、陰悪にならないようにしてきてはいた。

だが、彼女の頭の中で、白魔法は役立たずと言われた事はずつと残つており、更にこれまでの演習で十分に役に立つたとも言えず、黒魔法科ばかりが目立つていたので、気にはしていたのだ。

だが、今回彼女が、彼女だけが役に立つという状況になつて、妙に浮かれてしまつたのだ。

別にアールが憎いわけではない。

黒魔法科の連中より役に立つてゐる事が嬉しかつたのだ。

彼女らに役立たず劣等感を抱かせるとは考えてもいなかつただろう。

「凄く格好良かつたね、エメリイさん」

「シェリンも凄いと思うぞ、俺は」

「え？ そ、そうかな……」

「ああ、まさかハチミツを本氣でかけるとは思わなかつた」

「うん！ あれは大変だったんだよ！ 水と違つてねばねばしてゐからなかなか飛ばせないし、ちょっと魔法で力入れたけど。でもね、そんな事より！ 大切なハチミツをかけるつていう、その葛藤がね

……！」

「うん、まあ、ちょっと黙れ」

「ひどい！ ナスカから聞いて来たのに」

半泣きのショリンに額をぺちぺち叩かれながら、ナスカは何かい手はないかと考えてみる。

「うーん、どうしようもないのかなあ、何かいい手あるか、トイネ？」

「うふ、前提の話もなしにいい手を聞かれても答えようがないよね。今の状況を見ると、ショリンをどうにかする手を考えているようになしか思えないしね」

「その問題は、俺ら程度がどういう出来るレベルの話じゃない。白黒魔法の最高実力者が手を取り合って協力して、何とか出来るかどうかって話だろ?」

「言つてることはよく分からぬけど、私を馬鹿にしてるんだよね！」

ショリンが更に強く額を叩いてくるのを制するナスカ。

「エメリイとアールの話だ。今日のところは特にエメリイだな」

「あー。それはなかなか難しいね」

「やっぱりそうか。あの一人だけの問題じゃないしな。背後に白魔法と黒魔法の対立つて言つ根深い問題があるからなあ」

「うーん、多分あの一人にとつても、白魔法黒魔法つていうのは、あまり関係ないと思うよ。といつか、関係ないものにしたいと思つてこりとと思うよ」

トイネは腕を組んで思索しながら言つ。

「やうなのか？ 事あるじと魔力のことで喧嘩してると思つんだが」

「それはね、もう無意識だと思つよ。田の前に白や黒の魔法使いがいて、その子たちを認めてはいるんだけど、白や黒の魔法に対する長年の差別心や敵愾心つて言つのがあって、口を出しまつづていふか。偶然このチームで敵愾心を持つてるのはあの一人だけだから目立つけど、普通は全員がそんな状態だつたりするからね」

「やうか、そういえばそうだな……」

このチームはナスカやショリンのようなイレギュラーがいて、ト

イネのようになる兄が精霊を理解しているため、白魔法や黒魔法という考え方方がフラットな者がいるため、問題は他のチームよりも少ないのでかもしれない。

「でも、俺は『他のチームよりマシだから』とは考えないな。もつと仲良くさせる方法を考えないとな」

「そうだね、難しいだらうけど、いつかいい仲間になれるといいね」

「私もエメリイさんと仲良くしたいよ」

「ハチミツかけても仲良くなれないぞ」

「知ってるよ！？」

「まあ、あいつは悪い奴じゃないし、普通に話しかければ普通に仲良くなれるんじゃないかな？」

「そんな事ないよ、なんだかちょっと冷たいよ？」

「それはお前が何かやつたとしか思えないな」

「何もしてないよ！」

シーリンは言つたが、彼女がエメリイの気に障ることをしていないかといえばそうでもない。

それは、ナスカと必要以上に仲がいいという事だ。

「ま、あいつは本当にいい奴だから。それはアールも同じだろ？」

「うん、そうだね」

「きつかけがあれば何とかなると思うわ」

ナスカが、少し離れたところに一人を見つめる。

「みなさま何をしていらっしゃるの？ 早く行きませると、夜が更けますよ？」

光の珠を灯りにしているエメリイが言つた。

「うん、どうも新月みたいだから、真っ暗になるね」

「それはきついな、敵か味方かも区別が付かなくなる」

「見えないからって、変なことしないでよ！」

「うん、やるにしてもアールは『変なこと』の敷居が一番低そうだから後回しになるな」

「何なのよそれ」

「例えばエメリイなら、抱きついて『ママ』って泣き出しても怒らないぞ」

「そ、そんなことされたら、怒り……はしないかも知れませんが、出来ればやめていただけませんか……もし、どうしてもしたいなら構いませんが……」

「シェリンは間違つて頭を丸坊主にしても怒らない」

「何をどう間違えたの！？ 丸坊主になつたら怒るよ！？」

シェリンが頭を押さえる。

「どうだ！」

「……そのやり取りで、私になんて答えて欲しいのよ」

「そもそも、『暗くて敵も味方も分からぬ』んだよね？ だつたら、エメリイさんやシェリンのつもりでアールにそんな事するつてこともあるんじゃないの？ アールが抱き付かれたり、丸坊主にされたりしたらどうするの？」

トイネが正論を語る。

「……そりや、一番苦しい死に方で殺すでしょうね」

「じゃあ、ツインテール一本だつたら？」

「一番苦しい死に方で殺す」

「変わつてない！」

「ナスカさま、女にとつて髪は命ですよ。冗談でもそういう事を言つものではありませんわ」

「ああ、悪かつたな」

「……別にいいわよ。あなたの『冗談なんて、もう慣れてるし』」

アールはふい、と、誰もいない方を向く。

「！ あそこに何かいるわ！」

誰もいない方向。

新月の闇の中で、何かうごめく物を指差すアール。

「おい、エメリイ、ライト」

「はい！」

エメリイはその方にライトを向ける。

そこには何もいなかつた。

いや、半透明の何かがそこにいたのだ。

「……ゴースト？」

別名魔法使いの悪霊と呼ばれているのがゴーストだ。
靈的な存在であり、こちらからは一切触れられない代わりに、向
こうからも触れられない。

ただし、その魔法攻撃は強力だ。

「エメリイ、頼めるか？」

「はい！」

エメリイが、光の珠を強大化する。

ふわり、ゴーストはゆっくりと遠ざかる。

「追うぞ、ただし、近づきすぎると危いな！」エメリイのそばにいり
「う、うん！」

四人はエメリイのそばに固まり、逃げるゴーストを追う。
ゴーストは、ゆっくりと移動し、ナスカたちと距離が離れ過ぎた
ら止まり、近づきすぎると速度を速めた。

「……まるで、誘導してるみたいだな……」一旦止まって様子を……

「え？」

「あ！」

「わああああああああ！」

突然の地面の消失。

五人は、地面に開いた穴に落ちた。

(いたたたた……これがあいつのトラップか……)

ナスカはそう言おうとしたが、言えなかつた。

何かによつて口がふさがれていたからだ。

口の中が妙に甘い。

「！」

ナスカの口の中に、何かが入ってきて、暴れている。

「んっ！ んんん！」

何とかしようにも、頭が後ろから押さえつけられて動かない状態

であり、何も出来なかつた。

真つ暗で何も見えない。

「んー！ んん—————」

ナスカの顔の前で、荒い鼻息が聞こえる。

彼は意を決して、腕を使って頭を上げてみる。

「ふはあつ！ はあつ、はあつ！」

口の何かは外に出て、荒い鼻息が荒い息になる。

「お前は、口の中まで甘いんだな」

「うわーん！ 初めてだつたのに！」

田の前の泣き声はシーリンのものだった。

どうも落ちたとき、シーリンの唇とぶつかり、ティープなキスをしてしまつたようだ。

シーリンが直前にハチミツをなめていたのだらう、口の中はハチミツの味がした。

「ナスカ様！？ 何を口説き文句を言つているんですか！」

「いや、何でもない。といひで俺の頭の上に乗つてる奴、早く降りてくれないか？」

「きやあああつ！ な……なんであんたの頭が私のお尻の下にあるのよ！」

「そんな事言われても知るか、とにかく降りて……痛つ！ 何するんだよ！」

「うるわこつ！ 見るなつ！ スケベ！ ひのひ！」

「痛つ！ 後頭部殴るな！ 暗いし逆向きだから見えないつて！」

「うわ————ん！ 奪われた————！」

「お前はお前でうるさい……」

そんな騒動が収まるまでにほしばらくの時間を要した。

「つるさいつ、別に治してなんかいらないわよ」

「まあまあ、そり言うな、治してや……おいシェリン?」

「……仮想のフィールドだから、ノーカウント。うん、ノーカウン
トだもん、ぐすん」

「わけの分からないと言つてないでこいつに来い、アールの怪我
を治すぞ」

「わけわからぬくないもん、大切なことだもん……うわーん!」

また泣き出したシェリン。

しようがないのでナスカは耳打ちする。

「(おちつけ、今やつとお前が役立つときなんだぞ)」「

「(ぐすん、責任とつてくれる?)」

「(またホットケーキか何かか? 分かつた責任取るから泣き止め
つて)」

「うんっ、わかった!」

「耳元で大声出すなよ!」

「ナスカも出さないで!」

そうしてやつと、アールの怪我を治した。

ショリンは妙に浮かれている。

アールは騒ぎすぎたのか疲れ切つておとなしくなった。

とつさに風のクッシュションを利かせたトイネは無事だが、少し疲れ
ていた。

「とにかく、どうにかして、戻ろう。トイネの風魔法は使えるか?
「使えるけど、五人はきついね……」

トイネは風の魔法のかなりの使い手だが、それでも重力に反して
人を中心に浮かせるのは、かなり大変なことだ。
体力のないトイネには重労働であろう。

「うーん、一人上がつてもらつてロープで……!」

強烈な気配を感じる。

「何か来た!」

空気が変わる。

何も見えない真の暗闇。

何かがゆっくりとこちらに近づいてくる。

「ど、どうしよう……」

「落ち着け、エメリイ大丈夫か?」「

「はい……あ、あら……!」

エメリイの慌てる声。

「どうした?」「

「ひ、光が、出ません……!」

「！」

エメリイが何度も光を出そうとしていることは気配で分かるが、実際に光は出ていない。

「何? どうしたのよ! あんたの魔法しかないのよ! ?」

「分かりませんわ……! こんなこと初めてで……呪いか何かでしょうか……」

エメリイの焦りに、アールやエメリイも焦り始める。

「とりあえず、トイネ、あいつらを近づけないようガードしてくれ」「

「うん、でもゴーストがいたらどうにもならないよ」

トイネの風の壁により、ゾンビと思われる者の動きは止まった。だが、ここに落としたのがゴーストである以上、ゴーストがいるのは間違いない。

それが出てくれば終わりだ。

「どうか、精霊がいないんだ!」

ナスカは結論を出した。

「? よく分かりませんわ

「何? 何なのよ、何とかなるの! ?」

焦りながら声を上げるアール。

この世の魔法の多くは精霊を使っている、ということは新しい発見であり、まだ広まり切ってはない。

少なくとも学園の授業ではやらないのだ。

ナスカはトイネの兄であるミートネに聞いていたからこそ知つてい

るだけなのだ。

ここには今、光の精霊がいない。

光の珠とは、薄暗い中で光の精霊を集めてこそ出来るのだ。

『暗闇の中でも光を点す』というのが、光魔法使いの好むフレーズだが、完全な闇の中では全く通用しないのだ。

つまり、光を用意すればいいんだが……

「な、何かがすり抜けてきたよ！」

「俺の火か……いや」

ナスカが、目を閉じる。

何も変わらない、閉じても開いても闇だ。

「アール、あいつらに雷を打ち込め！」

「え？ 電撃は効かないわよ？」

「いいんだ！ エメリイはその直後に光の珠！」

「え？ は、はい！」

ばしい

アールの電撃が暗闇の中で光る。

そう、光つた。

「珠が、出来ました！」

エメリイの手の先に、眩い光の珠が生まれる。

「よし、アール、もう一度だ！ いや、光が大きくなるまで何度もだ！」

「分かつた！」

ばしい
ばしい！

「大きくなりましたわ……って、どうしてナスカ様とシェリン様は腕を組んでらっしゃるんですか！」

昼のように明るくなつた空間で、全てが光の下に映し出された。

ナスカはそれどころではなかつたため、氣にもしていなかつたが、
シェリンはナスカの腕をぎゅっと抱いていた。

「うわっ！ 何してんだよシェリン！」

「だつて、責任だもん」

「お前の言うことの半分も分からん！ 離せ！」

シェリンはしつこく食い下がつてくる。

「と、とりあえず、エメリイ、行け！」

「シェリン様、後で話がありますわっ！ 行きます！ 還りなさい

」

光は更に大きくなり、アンデットたちを照らし、そして、徐々に
消えて行つた。

そして、強い気配は、全て消えた。

辺りは再び暗闇に戻る。

「……終わったか？」

「みたいね……」

「ナスカ様？ シェリン様？ どこですかっ！ お話がありますっ

ナスカは、エメリイが面倒だったので、黙つていた。

シェリンも彼女が怖かつたので黙つていた。

「シェリン様！ あつ、きやあ！」

「ちょっと、暗いところで騒がないでよ……きやあつ！」

エメリイが、アールを巻き込んで倒れる。

「もう、何してんのよあんた！」

「も、申し訳ありません……」

エメリイは素直に謝る。

「……」

「何よ？」

「……そうですね、シェリン様より先にお話がある方がいました

「私？ 何の話よ」

「先ほどはありがとうございました。おかげで倒すことが出来まし

た

「べ、別にいいわよ、そんな事！」

「野蛮などと書いて申し訳ありませんでした」

「……うん、わ、わ、私こそつ、役に立たないとか言って悪かったわねつ」

アールの声はいつもよりかなり高かつた。

「…………」

「あのさ、今度……」

アールが話しかめると同時に、ほのかな灯りが辺りを照らす。ナスカが火の魔法を使ったのだ。

「ん？ どうした？ 二人とも顔が真つ赤だぞ？」

二人の目に映ったのは、シェリンの後ろをナスカが抱いている、魔法交換スタイル。

その後、怒り狂ったアールとエメリイから、シェリンを抱えて全力で逃げるナスカの姿があつた。

逃げた先に出口があったのは幸いだつただろう。

第一節

「おそーい！」

少し遠くからの声はショリン。

「悪いな……って、なんでこんな事になつてるんだ？」

街の喧騒の中、少し当惑しながら、ナスカがショリンの元へと向かう。

元々可愛いショリンの私服を初めて見るが、いつもとは違う魅力はあつた。

先日の演習中に、ショリンのファーストキスをナスカが奪つたとか奪つてないとかで、責任を取れと言われたナスカが安易に返事した事で、このようになつたのだ。

ナスカとしてはホットケーキの数枚でもおこるつもりでいたのが、何故か休日の朝に呼び出されたのだ。

「おはよー！」

「ああ、おはよー。で、どこに行くんだ？」

「もう！ その前に！ 何か言つ事ないの？」

「なんだよ？」

ショリンはもどかしい感じでくるり、と一回転した。

ミーのスカートがふわりと上がる。

「ああ、そう言えばエメリイが女の私服を見たらまずは褒めないと書いてたな。いいんじゃないの？」

「エメリイさんとか関係なく！ 率直な感想を言つて！」

「いやまあ、似合つてるぞ？ ショリンは可愛いからそういうのが合つてるしな」

「そ、そうかな……」

ショリンが照れたようにうつむく。

「ああ、で、どこに行くんだ？ この前のカフェか？」

「そんのはあとあと… まずはこっち！」

「なんだ？ そんな何軒も行くのか？」
ナスカの言葉は、街の喧騒に消えた。

「疲れた……」

ナスカは一言田にそう口にした。

オープンテラスのレストランは、昼時である事もあり、大いに賑わっていた。

やつと落ち着けたナスカにしてみれば、安堵の声だったのだ。
「でも楽しかったよ？」

「だろうな」

朝から服を選びに行つたり、花屋に行つたり、雑貨屋に行つたり、
シェリンにあちこち引っ張り回されていたナスカは、体力的にも精神的にも疲れていた。

別にシェリンの服選びに付き合わされても何も言えないし、絶対にあり得ない服を選んで怒られただけだが、それでもシェリンがとても嬉しそうだったのでここまで付き合つたのだ。

「女は何で買い物するだけでそんなに楽しそうなんだろうなあ」「楽しいから！」

「うん、まあ、お前に論理的な答えなんて期待してないんだけどな」「そんな事ないよ！ えっと、んー、あのね、お買い物をすることが楽しいっていつも、お買い物をしながら楽しく話をするのが楽しいの！」

シェリンが、本当に楽しそうに言う。

「俺なんかといるより、アールやトイネなんかといった方がよよほど楽しいんじゃないのか？」

「え？ うーん、もちろんアールとか、クラスの子達と一緒に行くのは楽しいよ。でも、ナスカと行くのも楽しいよ？」

「まあ、分かつたような気がしないでもない」
ナスカとしても全く楽しくなかつたわけではない。

女物の服や花や雑貨には何の興味もないが、シェリンとそれを見

て話していく分には楽しかった。

「それでね！ 午後からは、Hの方に行こうよ。」

「うん、まあいいけど、おじいの話をほりほりでいいのか？」

「？ 何のこと？」

「いや、だから、アンテッドと戦った時に前におじいの約束しただろ？ 責任か何かとかで」「え？」

「ん？ 何か違つてたのか？ ホットケーキおじいの話をだと思つて……」

「…………」

「やつぱりホットケーキじゃなきゃダメか？」

「もういいよ、ナスカの馬鹿！」

突然怒り出したシェリン。

「何なんだ。どうした？」

「ここはナスカのおじい！ でももつと食べる！ 死ぬほど食べて、後で体重増えて後悔するまで食べ続ける！」

「なんだか知らないがやめとけ、怒らせたなら謝るから理由を説明しそう」

「すみません、このティナー用メニュー今頼めますか？」

「だからー、落ち着いて事情を話せ、お前が太ったら俺も悲しいぞ」手を上げるシェリンをナスカが止める。

「…………本当？」

「まあ、食べ過ぎの女性を注意するとそこにほりほりバードHメリイが……」

「またエメリイさん！ 一言田にはエメリイさんのことぜりかり！」

「そんなに好きなら結婚すればいいのにー！」

「何怒ってるんだよ。……まあ、実際あいつとは結婚するかも知れないんだけどな」

「…………え？」

シェリンが動きを止める。

「いやまあ、あいつの家つて名家だけど、跡を継ぐ男がないんだよ。で、うちの親とあいつの親が仲良しで、結婚させようか、みたいな話はなくはない」

「……そ、そうなんだ……」

「でも、エメリイみたいな非の打ち所もない奴が、俺みたいな奴と結婚させられるのは可哀想だからさ、なるべく結婚しない方向に持つて行きたいとは思ってる」

「でも、エメリイさんは多分……」

「あいつも普段俺の世話をばかりさせられて、大変そうだしな。俺から早いところ開放してやりたいところだな」

「……」

ショーリンがため息をつく。

「何だよ?」

「なんで私、こんな死ぬほど鈍感な人に普段あんなに馬鹿にされるんだろう?……」

「何の話だ?」

「言わないよ。エメリイさんは嫌いじゃないけど、でも言わないつシヨーリンがぷい、と横を向く。

「お前の話はよく分からないが……ああ、女性と一人口りでいる時に他の女性の話はするなって……」

エメリイが言つてた、という言葉はあえて飲み込んだ。

「でも、ナスカは鈍感だけど、凄いのは分かったからいい

「まあ、否定をしておきたいな、それには」

「でもさ、エメリイさんみたいな綺麗で上品で頭もいい人と結婚できて、その上、上流貴族のの位ももらえるんだよ? 男の人にとって最高の夢じやないの、そういうの?」

「あー、そういうのはあんまり興味ないな。それなら俺は他の奴らみたいに騎士の方行つてたしな」

「え? あー、うん、そうだね」

ショーリンが少し考えてから、うなづく。

この国は王国であり、当然に最上位には王が存在する。

王家は女系なのだが、歴代の王自身は王家の血を受け継いではない。

王女、つまり王の娘と結婚した者が次の王となるのだ。

そして、王女と結婚できるのは、その時代で最も強く指導力のある者であり、通常騎士団から選ばれる。

ちょうど今の王女が年頃であるため、ナスカの年代の男はひそつて騎士団に入隊した。

ナスカはあまりそういうものには興味がなかつた。
だからこそ、魔法学園を選んだのだ。

「でも、例えば……例えればの話だけど、エメリイさんがナスカのことを愛していく、どうしても結婚したい、と言つて来たらどうするの？」

「そりゃあ、断る理由がないな」

「そりなんだ……じゃ、じゃあさ、普通の女の子が、好きつて言つて来たら、付き合つの？」

ショリンが言つと、ナスカが考え込む。

「そりゃあ、人によるだろ」

「じゃ、じゃ、じゃあさ、わわわわわたつ、わたたたつ、ああああ
のさつ、アールだつたら？」

「あいつが？ まあ、ありえない例えだうけど、悪い奴じゃない
し、親睦のためにも付き合つてみるとこりから始めることがあるかもな」

「じゃ、じゃあさつ、あのわ、わたつ、わたしつ、わたしのつ……
！」

「あ、あれアールか？」

「え？」

ショリンが振り返る。

ショリンの後方にあるレストランの入り口。
そこに一人の少女が立つていた。

「「」が私のお気に入りの店よ。あなたの舌に合つかは知らないけどね」

「構いませんわ。高級なものが必ずしも美味とは限らないと、ナスカ様もおっしゃりますし」

「あなたは一言田にはあいつの話なのねえ」

入り口で席を案内されているのは、見間違いようもなく、アールとエメリイだつた。

ナスカとシェリンはそのあまりにも意外な組み合せに、呆然として、何も言えなかつた。

「あれは、どういうことだ?」

「知らないよ、いつの間にあんなに仲良くなつたんだろ」

「まあ、せつかくだから、こっちに呼ぶか。おー……んぐつ。何するんだよ」

一人を席に呼ばうとしたナスカは、シェリンに口を塞がれた。

「やめてよ、呼ばないで。私、殺される!」

「ん? アールにか? でも白魔法科の奴といるのはあいつらも同じだから……」

「違うよつ! もうつ! ナスカには言つても無駄!」

「何だよそれ」

「シェリンは、ナスカくんといふとこをエメリイさんにはられるのが怖いんだよね」

「そうなのか……つて、トイネ? いつの間に」

四人座れるテーブルに一人で向かい合つて座つていたナスカとシェリン。

その空いている席に、いつの間にかトイネが座つていた。

「ずっと後ろにいたよ。ここはボク達みんなのお気に入りだからね。聞かれてるのが分かつたら、シェリンが恥ずかしさで自殺しかねないと思つたからおとなしくしてたけど」

「…………うん、しにたい」

シェリンが、今まで喋つていた内容を思い出して、死にたくなつ

ていた。

「大丈夫だよ。言わないよ、アールやエメリイさんにも、もちろん
ナスカくんにもね」

「俺と喋つてた内容を俺に言つても仕方がないだろ？」「
ふふふ、そうだね、ね、シェリン」

「ト、トイネ、何か食べる？ ナスカがおごるよつ」

「俺かよ！ いや、別にいいんだが、それよりもあっちだ」
ナスカが奥を指差す。

アールとエメリイは、少し遠いところに座つてているのが見える。
「この前あいつらの仲をどうにかしたいとか言つてたばかりだった
よな？」

「うん、これに関しては、ボクも今驚いたばかりだよ。ただ、さつきの会話を聞いた感じじゃ、まだまだ友達として打ち解けあつてゐ
つて感じじゃないよね」

「うーん、親睦を深めてみよう、つて感じなのか？ そうしてくれ
ることは願つてもないが、心配だな。喧嘩とかしないか？」
「大丈夫じゃないかな、心配だつたら近くに行つてみる？」

「よし、シェリン、行つて来い」

「ええっ？ わ、私？」

「ばれてもお気に入りの店だからいても怪しくないだろ？」

「う、うん、そうだね……」

シェリンはこそそと怪しい感じで一人に近づいていった。

トイネは自分が行つた方が状況をうまく伝えられるのになあ、と思つていたが、面白そうだから黙つていた。

しばらくして、シェリンが戻つてきた。

「どうだつた？」

「うん、あのね、ナスカは本当に駄目で許せないって
何の話をしてるんだあいつら、よし、行くぞ、來い」

「う、うん」

ナスカとシェリンは一人で近づいていった。

トイネは一人で行つて見つかつたら致命的だよね、と思つたが、面白そだから黙つていた。

「そういう、微妙な気持ちがあるんですの」

「んー、まあ分からなくはないわね。あいつの文句は言うけど、他の人間が文句を言つてたら許さないって感情」

「（全然違うじゃないか）」

「（に、似たようなものだよ）」

影の二人が言い合ひ。

「あんたは本当にあいつの事ばかりなのね。でも、あいつは頭は結構いいのは分かつたんだけど、こいつ面でかなり鈍感つていうか、特定の女の子に興味示さないわよね」

「ですよー！ その癖、どの女性の方にもお優しいから、勘違いする方は何人もいらっしゃると思いますわ！」

「（……エメリイが女性には優しくしおつて言つから優しくしてんじゃないか）」

「（ナスカは好きな女の子とかいないの？）」

「（そう言われるとなあ、特定の誰かつてのはいないな。だからと言つて、嫌いな奴もいないけどな）」

「あいつ、女に興味ないんじゃないの」

「まさか……男色？」

「（……そうだったんだ）」

「（いや、違うって）」

「（ううん、隠さなくともいいよ、そういうのもあると思うし）」

「（いや、本当に違うから）」

「（今度、クラスの男子紹介するね）」

「だからー、違うって言つてんだろー。」

ナスカは思わず大声で怒鳴つてしまつた。

振り返るアールとエメリイ。

驚いて動きを止めるショーリンと、彼女にぴったりとくつつくナスカ。

「ナスカ様と……シェリン様……？」

エメリイの表情が、シェリンには悪魔に見えた。

「あ！俺、用事を思い出した！ ちょっと行って来る！」

ナスカは空氣を察してダッシュで逃げた。

「……え？ ええええつ！」

ナスカに一秒遅れて我に返ったシェリンは、もはや逃げ出せない状況であることを理解した。

「 シェリン様？ ちょっとここにお座りになつて？ 拙舌は

切許しませんわ」

エメリイが冷たい口調で言つので、シェリンは立つていられないほど足が震えた。

遠くでトイネがやれやれ、と腰を上げた。

丘の斜面で寝転がるナスカ。

穏やかな風と、午後の優しい日差しが心地いい。

暗くなるまでのんびりしていたいところだが、そもそも行かないだろ。

彼の昼寝を邪魔する者がこちらに向かってゆっくりと歩いて来ているからだ。

「ナスカは……ひどい……」

「まあ、否定はしない」

シェリンが寝転がるナスカに馬乗りになる。

「怖かった！ 怖かった！ 怖かったあああああつー！」

ペシペシと額を叩かれる。

「痛つ！ そこまで怖がるなよ、いくらなんでも覗き見してただけでそこまで怒らないだろ」

「違うよつ！ もつつ！ ナスカの鈍感！ 本当に怖かつたんだよ

！」

ペシペシペシペシ

半泣きでペしペし額を叩かれるのは、あまりいい気分ではないが、シヨリンの氣が済むまでさせてやつた。

しばらくして疲れたシヨリンが呴くのをやめ、ナスカの横に座つた。

「本当にナスカはひどいよね。アールトイネが仲裁してくれてなかつたら、どんなことになつてたか分からないよ。それに、結局おごつてくれなかつたし」

「あー、そう言えばそつだつたな。いや、それはおるね、いくらだつたんだ?」

「……エメリイさんがあいつてくれたよ」

「そうか。まあ、悪かつたよ。また今度おじるね」

「うん、なんかもうそれでいいよ」

心底疲れたように、シヨリンがつぶやく。

「でも、あの二人が仲良くなつてよかつたよな」

「うん……その代わりに私とエメリイさんが……まあ、それはいいよ」

「エメリイと何かあつたのか? まあ、わざわざの事なら俺からも何か言つておこひ」

「多分、逆効果だと思つむ……うん、まあ、じつちで何とかするから」

シヨリンは疲れたよつに寝転がる。

「今日は疲れたし、色々失つたものが多いけど、それを引き換えてにしても、楽しかつたよ」

「そうか。よかつたな。お前が乐しかつたなら、俺も嬉しいぞ」

「……それも、エメリイさんに言われたの?」

「いや、純粹にお前の楽しそうなのを見てたら、俺も樂しくなつただけだ」

「そつか……うん」

シヨリンは少しだけ嬉しそうな顔をした。

丘の斜面に寝転ぶ二人。

「次から、実演習だな」

「うん……ちょっと怖いね」

「まあ、確かに俺も怖いな。本当のところ、死ぬ可能性だってあるし、怪我なんて当たり前にあるだろうからな」

「うん……怪我はなるべくしたくないね」

「大丈夫だらう、仮想演習でも怪我はあつたけど何とかなってるしお前もいることだし」

「私？ 私がどうかしたの？」

「お前の魔法があれば、精神的に心強いんだよ。怪我は怖いけど、ちょっとした怪我なら治せるだろ？ それだけで結構精神的に違うからな」

「うん……でも、治す機会がなかつたら、やっぱり役立たずだね……」

「そうじゃない、お前はそこにいる事が俺らの最大の強みなんだよ。活躍する必要はないし、しない方がいい。けど、そこにいるかどうかで精神的に全然違うんだよ」

「何となく分かつたような、分からぬような」

「それでいいぞ。馬鹿な頭で考えなくとも、お前を必要としている人がいるという事だけ覚えておけばいいんだ」

「馬鹿つて言わなくともいいよ！ 分かつてるもん。でも、うん、私は私の出来ることで頑張るよ」

シーリングが起き上がる。

「じゃ、今日はありがとう、本当に楽しかったよ！」
につっこり笑つて彼女はそう言つと、駆けて行つた。
ナスカはもう少しだけ、そのまま寝転がつていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3589ba/>

白い黒と黒い白

2012年1月14日17時45分発行